夢の館

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢の館

【Ｎコード】
Ｎ１９５９Ｅ

【作者名】
秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】
それは幻聴か幻視か、紅玉が艶やかに燦然と耀くよう、華やかな舞踏会は紅く燃え上がった。そして、目覚めれば見知らぬ屋敷にいた記憶喪失の青年。多くの謎に包まれた女主人マダム・ヴィーと、一癖も二癖もある客人たちの狂宴。覗いてはならぬ、謎の扉を開いた先にあるものは……。
たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

夢のはじまり

無明の空間で混濁するおぼろげな意識。
二つの影絵人形が舞踏する姿に合わせて、楽師たちの奏でる調べが忘却した記憶を呼び起こすように脳内で木霊する。
それは幻聴か幻視か、紅玉が艶やかに燦然と耀くよう、華やかな舞踏会は紅く燃え上がった。
鋸を引くような猛悪な演奏の中で、紳士の影絵人形が暗冥の魔獣に変貌し、次々と淑女たちを喰ろうていく。
切り離された腕や脚やはたまた首が、回転木馬のように目まぐるしく廻る。
柱時計の振り子が刻む音。
頭が割れるほどに響き渡る鐘の音の遠く先で、微かに聞えてくる映写機の廻る音。
無機質な演劇は機械的に進み、やがて朱に染まった世界は、樹脂が溶けるように穴を開けながら崩れていく。
紅蓮の炎に包まれた淑女が自らの頸部を押さえ、藻掻き苦しみながら死の灰となって舞い上がった。
その光景をただじっと丸い瞳で見つめていた少年……。

「母さん！」
その若者は冷たい寝汗を掻きながらベッドから跳ね起きた。
とても嫌な夢を見たような気がしたが、まるで頭の中に靄がかかったように何も思い出せなかった。ただ、嫌な夢だったという印象は強く残り、手に握る冷たい汗と胸がむかつく吐き気が、証拠として今も如実に残っている。
若者は汗を拭こうと額に手を伸ばした。するとそこに違和感を生じ、目隠しのような物があることに気付いたが、開けている視界から察するに目隠しではなく別の物。不審に思いながらそれを外そう

とすると、「外してはなりません」と若い女の声がした。
「なんだ！」若者は振り返り震える声をあげた。「すまない、急に大声を出してしまって、それにしてもあなたはいったい？」すぐに詫びを入れたが、その瞳は泳ぎながら奇異な色で女を見ている。
異様とも言える女の姿は誰もが驚きで息を呑むに違いない。使用人風のエプロンドレスを着た首から下は特段に目を引く物ではないが、問題はその首から上の頭部全体を覆う黒いフェイスマスクである。目と口の部分だけが覗くそれは異種異様であり、まるでギロチン刑の処刑人が顔を隠しているようで、悪辣で背筋を走る寒気が全身を硬く凍らせてしまう。
どこやらここは屋敷の一室のようである。建物の造りは野暮ったく、柱や壁に装飾などないのだが、置いてある家具などは優美で繊細な曲線で装飾され、ロココ様式を意識した物ばかりで埋め尽くされていた。見る者が見れば屋敷の趣向と家具が不一致であると感じてしまうだろう。
使用人風の女は若者の目の前に手鏡を出した。「そのマスクは決して人前で外さぬようにお願いします。それがこのお屋敷での決め事でございます」
目の周りを覆う白いマスクは質素な作りで、その一部を隠すだけで顔全体を無機質に見せる。
混乱する若者の頭。自らの頬や鼻筋、髪の毛に至るまで触れてみた。言い知れぬ恐怖に若者は気付いてしまった。
――マスクの下にどんな顔があったか思い出せない。
そればかりではなく、自分はいったい何者か、この部屋がどこなのか、過去のことも何一つ覚えてない。顔を見れば手がかりがと思い、手に汗を滲ませながら慌てて若者はマスクを取ろうとした。だが、女に手首を掴まれ制止させられてしまう。
「決して人前では外してはなりません」淡々とした口調。
若者は焦る気持ちを抑えながら、マスクから手を放して女の言うことを聞いた。

少し若者は苛つく口調で「なぜ外してはいけないんだ？」と尋ねると、女の口元が微かに震えた。
黒いフェイスマスクから覗く眼と口は、顔の全体像が見えるときよりも強調され、微かな感情の変化もありありと映し出される。顔全体が見えていれは気付かなかった女の動揺。口元の震えは果たして何を意味しているのか。
しかし、女の声音は淡々たるものだった。「お館さまのご命令です」
「お館さまとは、ここはいったいどこ……いや、それよりも僕はいったい誰なんだ？」
若者が記憶を失っていること知らなければ、聞いた方はおかしな質問だと戸惑うだろう。自らもそのことに気付いて若者は言い直した。
「実は記憶がないんだ。ここで目を覚す以前のこと、自分が何者で何をしていたのか、名前すら思い出せない。僕はいったい誰で、どうしてここにいるか教えてくれないか？」
「貴方様が何者であるかわたくしは存じ上げません。この屋敷に滞在する者は自らの素性を明かさないというのも、決め事の一つとなっておりますから。わたくしはお館さまから貴方様のお世話を任された召使いに過ぎません」
マスクと素性を明かさないという決め事。異様さを感じずにはいられない。なぜそんな場所に自らがいるのか若者は理解に苦しんだ。
「僕の世話を任されていると言ったが、どのくらいここに滞在していて、僕が君に今までどんなことを話したか教えてくれないか？何か記憶を取り戻す手がかりがあるかもしれない」
ベッドで目が覚めたのだから、この屋敷で過ごした時間がある筈で、世話係の女とも何度か顔を合わせて、会話の一つや二つしているに違いない。だが、女の言葉は全てを裏切った。
「貴方様とお話させていただくのは、これが初めてでございます。なぜなら貴方様はわたくしが世話を任されてから、もう三日もこの

ベッドで寝たきりで目をお覚ましになられませんでしたから」
「どういうことだ？」
「わたくしはただの召使いに過ぎません。答えられることには限界がございます」
知っていて答えないのか、それとも本当に何も知らないのか。
若者の頭の中で質問が頭痛を引き起こすほどに木霊する。山のように訊きたいことがある。自らの記憶を取り戻す手がかりになりそうなこと、今置かれている環境について。この召使いの女は若者の素性を本当に知らないのか、それはわからないが、答えない以上は質問しても無駄であるから、別のことを尋ねるのが妥当だろう。
「この場所はどこで、誰の屋敷で、君の答えられる範囲でいろいろ教えてくれないか？」
「お館さまは……」少し口ごもる様子を見せながら、言葉を続けた。
「マダム・ヴィーさまでございます」
「ヴィーとは変った名だな」
「名前ではなくアルファベットでございます。この屋敷では本名を口に出すことが禁じられているため、滞在する者も含めて皆、アルファベットで呼び合うことになっております」
素性を隠すためだけにしては、マスクと言い異様な決め事だ。
さらに召使いの女は言葉を続ける。「まだ貴方にはアルファベットがございません。アルファベットはお館さまが付けてくださいます」
「君にもアルファベットがあるのか？」
「いいえ、わたくしはただの召使いに過ぎません。人間以下のわたくしたちは、単純に識別するためだけに番号で管理されております。わたくしの場合は二号と」
人間以下……屋敷の主は人格者ではないのだろう。二号の異様な格好を見れば、『束縛』されていることは容易に想像できる。フェイスマスクは拘束具の一種であり、それは肉体を支配する物であるが、二号は心までも『拘束』されている。それは『お館さま』と呼

ばれる者の話題をするときの態度を見れば明らかだ。
　おそらくお館さま――マダム・ヴィーはこの屋敷に置いて絶対的な権力を持っている。もしかしたら、その影響力は屋敷の外にまで及んでいるのかもしれない。それを想像する根拠は、滞在者にも異様な決め事を強要することだ。若者の素顔を隠す無機質な仮面。
　異様な決め事はマダム・ヴィーの趣向か、それとも深い意味が隠されているのか。根拠や物証のない推測は、正しい答えを見いだすには及ばない。現時点での推測はあまり意味のあることではないだろう。多くの謎はマダム・ヴィーに尋ねるのが筋であり、若者が何者であるかという答え、もしくはそれを導く手がかりは、おそらくそこにある。
「マダム・ヴィーに今すぐ会いたいのだが？」若干、焦る口調で申し出た若者。
「……おそらく、今は誰ともお会いになられないと思います」答えるまでにあった数秒の黙しから、異様な空気を感じ取ることができた。その黙しの最中、これまでになく唇を振るわせていたのだ。
　まるで問い詰めるように「なぜ？」と強い口調で若者は尋ねた。
　しかし、二号はその問いかけに答えることなく、「夕食のときにお館さまとお会いできます。それまでにお着替えになって、身支度を済ませておいてください」
「夕食か……」
　若者は大きな窓の外に視線を移した。
　空は夕闇に染まり、沈みゆく朱色に蒼の闇が覆い被さっていた。
　ぼんやりと外を眺めていると、何か扉のようなものが開く音が若者の耳に届いた。そちらに顔を向けると、二号がクローゼットを開けて立っていた。
「お着替えはこちらにご用意してございます」
「用意がいいな」
　良すぎると言ったほうがいい。用意されていた服は一つや二つではなく、クローゼットいっぱいに服が詰まっていた。この待遇の良

さに疑問を感じずにはいられない。
目を覚ましてから疑問ばかりだ。
時折、隠し事があるようなそぶりを見せる二号の言葉を、すべて信じることは心情的にどうしてもできないが、嘘をついているという確証もない中で、今までの会話をすべて鵜呑みにするのならば、三日の間は寝たきりで目を覚まさなかったという。そして、若者と話をしたのは、先ほどが初めてだと言った。
この屋敷にはいつからいるのだろうか？
三日間は寝たきりで、それ以前は会話を交わしたことがない。
記憶を失ったのはいつ、『どの場所』だったのか？
二号はすでに部屋を出ようとしていた。
「では、お食事の時間に呼びに参ります」
軽い会釈をして部屋を出て行く二号の背中に「まだ……話が」若者は声を掛けたが、扉の閉まる音が虚しく響いた。
部屋に独り残された若者は、しばらく難しい顔をして立ち尽くしていたが、急に歯切れよく動き出してクローゼットの中を物色しはじめた。
この衣服は若者の為だけに用意されたものなのか、はじめから屋敷にあったものかのか、それとも……という考えが脳裏に過ぎる。その考えとは、自分の持ち物なのではないかという予感である。なぜそう思ったのか、確証があるわけではないが、しいていうならば直感でそう感じた。
いくつかの服を見たが、若者はすぐに着替えることはしなかった。
部屋を軽く見渡して、何かを探すようなそぶりを見せる。物を探すと言うより、部屋を見取るように眺めている。
「シャワールームはないのか？」
呟いて若者は歩き出した。
三日間、寝たきりであったのならば、シャワーも浴びて汗を流したい。それとシャワールームの近くには鏡がある筈だ。手鏡は二号がなぜか持っていってしまったらしく、自分の素顔を見るためにど

うしても鏡を探したかった。
若者は歩きながら自分の手や腕の臭いを嗅いだ。ほのかに石鹸の匂いがする。続いて、髪の臭いも嗅いでみた。まるで洗い立てのような、芳しい花の匂いがした。
寝ている間に体を洗われていたと考えるのが自然だろう。ならばシャワーを浴びる必用はないが、鏡は見つけ出さなくてはいけない。
部屋を移動してすぐに洗面台を見つけることができた。その場所に鏡はなかった。代わりに壁には、そこにあった物を外したような跡が残っていた。おそらく鏡を外した跡だ。
しかし、どうして鏡を外す必用があったのか？
何らかの理由、例えば割れた鏡を取り替えるために、そこにあった鏡を外したと考えるのが、普段の生活では考え得ることだ。が、疑惑ばかりのこの状況では、勘ぐってしまわずにはいられない。
「僕に見られてはいけないモノがある……素顔」
例えそうであったとして、理由が不明瞭である。
人前では仮面を外してはいけない。その決め事と関係があるのか、それとも……記憶を失っていることに関係があるのか。
記憶を失った原因は何か？
若者は考えを巡らせることに没頭して、ふと我に返ったときに、無意識のうちに腕を掻いていることに気付いた。掻いていたのは腕の裏側。爪で引っ掻いて赤くなったその場所に目を凝らした。
眉を寄せて怪訝な表情をした。
まるで虫に刺されたような痕が一つあり、少しずれた場所にもう一つ。ここで若者は急に首に手を当てた。そこにもあった、指先に触れる痕の感触が首にもあったのだ。
視界が瞬間的な転換を起こし、脳裏に刹那、艶やかな唇が浮かんだ。
妖しく嗤う女のルージュ。
何か思い出せそうになった瞬間、若者の頭が急に痛み出し、辺りが急に白い靄に包まれ、そして闇に沈んだ。

夢のはじまり（後書き）

しっくりくるジャンルがありませんでしたので、ホラーということにしましたが、これは怪奇ミステリ小説だと自分では思っています。ミステリーは推理小説の意味ではなくて、怪奇、謎、神秘の意味でのミステリーです。（なのでミステリと伸ばしませんでした）

怪奇のほうの意味は、ホラーの意味です。

しかしホラーと明記すると、多くの方は恐怖小説のほうを思い浮かべたり、もしくはスプラッターでグロなどを想像するかもしれません。

ここでの怪奇はたしかに翻訳的にはホラーですが、古典的な雰囲気を醸し出せればいいと思います。

あとこの作品の書き方は、現代の小説ばかり読んでいる方には読みづらいかもしれません。

しかもケータイからではおそらく最悪だと思います。

作風重視にしたので、読みづらい点は申し訳なく思います。

マダム・ヴィー

体を揺さぶられる。
「大丈夫でございますか？」
女の声で目を覚ました若者は、息を呑み体を強張らせた。目の前には不気味なフェイスマスクがあったのだ。すぐに二号だとわかり気を取り直した。
「わからない……急に頭が痛くなって、僕は気を失っていたのか？」
洗面台がすぐ近くにある。記憶が途切れる前にいた場所と同じ場所だ。
若者は立ち上がろうとしたが、足に力が入らず倒れそうになり、二号の肩を借りてどうにか立ち上がることができた。
「ずっと寝たきりでしたから、まだ体が動かないのでしょう。あまり急な運動などなさらぬようにお気をつけください」貧血か何かで倒れたとでも二号は言いたいのだろう。だが、若者は急な運動など覚えなどない。『何か』があって急に頭が激しい痛みに襲われた。
若者は背筋が冷たくなったのを感じた。
『何か』とは何だったか。
気を失う直前の記憶が失われていたのだ。
漠然として『何か』があったということまでは思い出せるのだが、具体的に何があったのか思い出すことができない。
二号が急かすように言う。「夕食のお時間です。皆様に失礼のないように、お着替えになって身なりを整えてください」
マダム・ヴィーに会えるときがきた。これでいくつかの疑問は解消されることになるだろう。それとは別に気になる点があった。
「皆様と言ったが、マダム・ヴィー以外に夕食を共にする者がいるのか？」
「はい、この屋敷に滞在している客人が何人かおります」
元より客人の出入りの多い屋敷なのか、それとも何かの集まりで

もあるのか。その者たちは若者のことを知っているのだろうか？
急かされるまま若者は着替えに取りかかる。すぐ傍でこちらを見つめながら二号が立っている。
「お手伝いいたしましょうか？」
「いや、少し後ろを向いていてくれないか？」
「かしこまりました」
二号は背を向けて壁と向かい合った。忠実な召使いといった印象がした。おそらく着替えの手伝いなども、普段からしているのだろう。客人に尽くすように躾けられている。
若者は何気なく選んだ服に着替えながら、こんなことを尋ねた。
「僕が目を覚まさなかった間、僕の体を洗っていたのは君か？」
「はい、すべてのお世話を任されておりましたから」
「ほかに何か僕にしたか？」
「ほかにと申しますと？」
淡々として感情が読めない。この二号が動揺などをすると、すぐに察することができる。それを踏まえるなら、ほかに何もしていないと考えられる。
「いや、今の質問は忘れてくれ。特に意味はなかった」
意味はあった。だが、こちらの思惑を悟られることはよくないと若者は考えた。多すぎる『疑惑たち』に疑念を抱いていることを知られることは、危険と直感的に判断した。
失われた記憶、取り外された鏡、急に襲ってきた頭痛。
それらがすべて仕組まれたことであるとするならば、変に探りを入れるよりも、道化を演じていたほうがよいと思ったのだ。
着替えを済ませ、若者は二号に連れられて部屋を出た。
長い廊下はこの屋敷の大きさを示していた。床には真紅の絨毯が敷き詰められており、とても印象に残るが、若者の記憶にはこの映像はなかった。
おそらく屋敷の中心、巨大な階段が滝のように二階から一階へと伸びていた。階段を下りてそのまま進めば玄関がある。

階段を下りる前、若者は玄関から見えるであろう階段を上った先にある壁を見て、階段を下りたあとに再び来た道を振り返って、その壁を見た。壁には汚れのような跡があった。直感的に巨大な額縁のような物があったのではないかと思った。

玄関に入ってすぐ見える巨大な階段の先に見える壁にあった物。権力者が自らの威厳を誇示するために、玄関から入ってきた者を見下ろす位置にあったそれは、おそらく権力者の肖像か何かだろう。

「あの場所には絵か何かがあったのか？」

若者は壁を指さしながら何気ないそぶりで尋ねてみた。

「はい。ですが、新しい絵を飾るためにお館さまが外させました」

「新しい絵？」

「お館さまの肖像でございます」

その言葉が意味するところは、以前はマダム・ヴィー以外の絵だったということだろうか？

疑問が残るがそれ以上の質問を若者は控えることにした。

食堂に着くと、すでに二人の人物が席に着いていた。

一人はおそらく若者で、紳士風の身なりをしているが、目元を隠すマスクの下にある形の良い唇は、どこか砕けた表情を浮かべている。

もう一人もマスクで顔を隠しており、こちらはあまり年齢がはっきりしない女。肌の露出の多いドレスから覗く肉体は、若くては決して醸し出せない艶やかな色香を放っていた。

この場に現れた新たな客人にいち早く気付いたのは、紳士風の若者だった。

立ち上がった紳士は若者に握手を求めてきた。「はじめまして、君が噂の客人だね？」歌うような甘い声音。

若者は握手に応じながら尋ねる。「噂のとはどういう意味ですか？」

「事故に遭われて、部屋で静養していたと聞いているが？」

「ええ、まあ。もう良くなりました」

事故とはどのようなものか聞きたかったが、記憶を失っていることを伏せることにした為、疑問をぶつけることはしなかった。
『はじめまして』と挨拶されたということは初対面。もう一人の女はどうだろう？
「あの」
と、若者が声を掛けただけで、女は金切り声を上げた。
「話しかけないで！」
女は苛々した様子で爪をかじっている。
紳士がため息を落とした。
「彼女はいつも不機嫌らしくてね、あまり関わらない方が身のためさ。この屋敷はいつも来ても変わり者の客人ばかりで困るよ」
「いつ来てもということは、この屋敷にはよく来るのですか？」
「ボクは常連だね。申し遅れたが、ボクの名前はＪという。もちろん、この屋敷での偽名だよ。そこの彼女はＳ、彼女も客人らしいけど、ボクと違ってこの屋敷に長く住んでいるみたいだね。もう一人、この屋敷に住んでいる客人にＭという淑女がいてね、部屋にこもっていることの多いけど、そこの彼女と違って良い淑女だよ」
爪を噛んでいたＳがマスクから覗く二つの眼でＪを睨み付けた。
「いつかその喉元を掻っ捌いて口を利けなくしてやる」
呪詛のような言葉を吐き捨てられても、Ｊは口元で笑顔を浮かべていた。
「怖いことを言うね。いつキミに殺されるか楽しみだ。しかし、ボクを手に掛けるなら、せめてベッドで抱き合っているときにして欲しいな。それなら喜んで死ぬよ」
「お前のブツを切り取ってケツの穴に突っ込んでやろうか！」
汚い言葉を吐きながらＳは用意されていた食事用のナイフを握っていた。
狂気を前にしてもＪは平然としていた。
「生憎だけど、ケツに挿れられる趣味はないよ」
そう言ってＪは含み笑いをした。

Ｓはフォークを握ってテーブルに力強く突き立てた。
「殺してやる！　いつか絶対に殺してやるからな！　キャハハハハハ！」
ヒステリックなＳは高笑いしながら立ち去ってしまった。
静まりかえった部屋でＪが「いつもこんな感じさ」と呑気に笑った。「彼女は口は悪いが、この通りボクはまだ生きている。ま、そういうことだよ」
すぐに別に者が部屋に入ってきた。
「いやぁ～、すれ違いざまにあの女に怒鳴られちまったよ。なんかあったんですかい？」
小太りの男。やはり顔にはマスク、そして頭には中折れ帽子を被っている――室内だというのに。
説明をしようとＪが口を開く間もなく、小太りの男は眼を丸くして若者に駆け寄って来た。
「おおっ、やっと眼を覚ましたのか！　二人とも助かったなんて俺たちツイてるな」そう言いながら、小太りの男は中折れ帽子を取って、包帯が巻かれた痛々しい頭を見せた。「俺はこのとおり酷い怪我を負っちまったが、どうにか助かった。ほんとマダム様々だな」
若者は理解に苦しんだ。この小太りの男は何を言っているのだろう？
小太りの男は中折れ帽子を被り直して、なおもしゃべり続ける。
「俺はここではＧってことになってるからよろしくな。本名を呼ばないように気をつけてくれよな」
悩んでいた若者の前に一筋の道が現れた。
「僕のことを知っているのか？」
「おいおい、なに言い出すんだ。お前も頭打ったんじゃないだろうな？」
「いや……」口ごもった若者は、「あとで二人で話さないか？」
「お前どうしたんだ、なんか変だぞ？」
「まだ目を覚ましたばかりで……大丈夫。僕が寝てる間になにがあ

ったか、あとで聞かせてくれよな、な？」
最後は平静を装ったが、Gは不思議な顔をして若者を見つめている。そんな表情をしたいのは若者のほうだ。
記憶がない。出会う人はすべて初対面だ。不思議や疑問ばかりが山積している。
しかし、若者は目の前の小太りの男が自分の知り合いではないかと考えた。
Gの言動を思い出してみる。
――二人とも助かった。
一人は怪我をしたG本人のこと、もう一人は話しかけられている人物、つまり若者である。これから推測されることがらは、命の危険に晒されるような事故か何かがあり、Gは頭に大けがを負い、若者は三日もの間気を失っていた。そうなると、記憶を失ったのも、この事故の為だと思われる。
――本名を呼ばないように。
この台詞が決定的な証拠となる。若者がGの本名を知っていることを前提にされた言葉であり、二人が知り合いであることを明確にしている。この屋敷の決め事を破っていないのであれば、屋敷の外でなければ本名を知り得ない。
失われた記憶を取り戻す鍵をGは握っている。
あとで二人で話そうと誘ったが、本当は今すぐにでもいろいろと話を聞きたい。はやる気持ちを抑えることは難しい。
……しかし。
急に空気が変った。糸を張り詰めたような緊張。
Jが恭しくお辞儀をして、Gも慌てて中折れ帽子を取って頭を垂れた。
薄布の赤いドレスを着た車椅子の女。
二号と同じ格好をした別の召使いに車椅子を押され、ベールで顔を隠した女が現れた。
隠された顔でただ一箇所、露わにされている艶やかな――ルージ

ュ。
女は松葉杖を受け取り立ち上がった。
靡くドレスの裾。女には片足が無かった。腿の辺りから先が無く、風を受けたドレスが揺れる。
「ご機嫌よう皆さん。そして、はじめまして新たな客人。我が屋敷にようこそ、歓迎いたしますわ」
マダム・ヴィー。
お館さまと呼ばれるその女。
張り詰めた空気、畏怖する召使いたち、威圧感を放つその姿はさながら女帝のようだ。
優雅な身のこなしでマダム・ヴィーは手袋を外し、若者に手の甲を差し出した。
その行動の意味がわからずに立ち尽くす若者にJがそっと耳打ちをする。「彼女は男をかしずかせるのが好きなのさ。跪いて手の甲に接吻をしてあげたまえ。ぐずぐずしていると機嫌を損ねてしまうぞ」
少しぎもちないながらも若者はマダム・ヴィーの前で跪いた。細く長く伸びる指先は、真っ赤に爪化粧され、その指を軽く手に取った若者は、息を殺して青白い血管が浮かぶ甲に接吻をした。
ベールの下で艶笑するルージュ。優悦に浸っているようにも見える。
顔を隠していても、その視線はベールの下から強く感じられる。どこか熱っぽいその視線に若者は汗を握りながら、ルージュの唇を見上げた。
「お目にかかれて光栄ですマダム・ヴィー。事故に遭った私と友人を助けていただいたようで、なんとお礼を言ったらいいのか……」
そんな記憶などなかったが、間違ってはいない筈だ。
「当然のことをしたまでよ。ご友人共々傷が癒えるまで何日でも我が屋敷に居ればいいわ。この屋敷で骨を埋めてもらってわたくしは構いませんことよ」

「お気持ちは大変有り難いのですが、私にも生活がありますので、何日もお世話になるわけには……」
生活？　自分で言っていて若者は心の底で苦笑した。そんなもの覚えていないというのに――。
突然、Gが若者の肩を叩いた。「そう固いこと言うなよ。マダム様のお言葉に甘えさせていただこうぜ。俺の傷の具合もまだ良くならんし、もともと長い休暇の予定だったんだ。この屋敷で静養してもいいだろう？」
「あ、ああ」流れのまま若者は頷いてしまった。
話にJが割り込んでくる。「マダム・ヴィーに立ち話をさせては悪いだろう。お腹も空いたし料理も冷めてしまう。話は食事をしながらでもできるだろう。ねえ、マダム・ヴィー？」愛嬌のある仕草で首を傾げている。
「そうね、お食事にいたしましょう」マダム・ヴィーは速やかに背の後ろに用意された車椅子に腰掛け、食事の席に着いた。

Jの視線

七時ちょうど、全員が食卓に着くと料理が次々と運ばれてきて、マダム・ヴィーの合図で食事がはじまった。

若者は料理に目もくれず、マダム・ヴィーに話しかけた。「まだ目が覚めたばかりで困惑することばかりです。大変申し訳ないのですが貴女のこともよくわかりませんし、実を言うと事故のこともよく覚えていないのです」

なぜかマダム・ヴィーの唇が微笑みを浮かべた。「あんな事故に遭ったのだから無理もないわ」

「あんな事故？」

「狩猟の最中、崖から転落したのですわよね、G？」マダム・ヴィーはGに顔を向けた。

「マダム様の言うとおり。獲物に気を取られた俺が崖から足を滑られて、助けようとしたお前といっしょに落ちちまったってわけさ」

間髪入れずマダム・ヴィーが続ける。「そこへわたくしの召使いが偶然通りかかり、意識を失い怪我をした貴方たちを見つけたということよ」

筋は通っている。

しかし、記憶を失っている若者としてみれば、どんな説明を受けても確信は得られない。

今はより多くの情報を手に入れ、記憶を呼び起こす手がかりにするほかあるまい。

「僕たちを見つけてくれた方に礼を言わねばなりませんね」

「うふふふ、召使いに礼だなんて、おもしろいことを言うのね」一笑したマダム・ヴィー。

若者は相手の地位に関係なく、命の恩人に礼を尽くすのは当然だと思いながらも、あえて反論は控えた。

「しかし、事故のことを詳しく知りたいので、その召使いに会いたいのですが？」
「どの召使いだったかしら……あとで話を付けて置くわ」
おそらく彼女にとって召使いは皆同じ、そのためにどの召使いが何をしたかなど、覚えてもいないのかもしれない。
「ありがとうございます」若者は礼を言い、「ところで、この屋敷には僕とG以外にも何人か客人がいるようですが、いったい何の集まりなのでしょうか？　部外者の僕らがいてはお邪魔なのではないかと」
「気にしなくていいのよ。集まりなんてたいそうなものではないわ。ただの静養で訪れているだけなのだから……」
マダム・ヴィーの言葉には含みがあるような気がする。
赤ワインを片手にJが話に割り込んで来た。「マダム・ヴィーの言うとおりさ。ここはいつでも客人を歓迎してもてなしてくれる。おかしなルールもあるけど、ほんのお遊びのようなものさ」
おかしなルール――マスクやアルファベットの名前のことだろう。そう言えば、若者にはまだアルファベットが付けられていなかった。
マダム・ヴィーはそのことを思い出したらしく、「そうだわ、まだ貴方には名前がなかったわね。そうね、Aなんてどうかしら、貴方にぴったり。それ以外に考えられないわ、Aに決めましょう。今このときから、貴方はAよ」
――A。
マダム・ヴィーの独断で決められたアルファベット。何を理由にAと名付けられたのか、それはマダム・ヴィーのみが知るところだろう。
Aと名付けられた若者。記憶を失い本当の名前すら思え出せない彼には、仮の名前が与えられることはちょうどよい。決め事があれば本名を尋ねられることもなく、それによって口ごもる心配もないだろう。
しかし、「改めてよろしく『A』」とJに挨拶されたが、Aにな

ったばかりの若者は反応に遅れてしまった。
「ああ、僕のことか。まだ慣れないモノで申し訳ない。こちらこそよろしく」
AとJはワインを酌み交わした。
さらにマダム・ヴィーが祝杯をあげる。
「名前も決まり、正式な客人としてAを迎え入れましょう。わたくしの屋敷では自由にしてもらって構わないわ。ただし守るべき決め事は守ってもらえなければ、客人としてもてなすことはできないわ」
いくつかの決め事とその理由を述べる。「人前では決して仮面を外し素顔を晒してはいけない。本名を名乗る行為もこの屋敷では固く禁じるわ。なぜなら皆さんには表社会での地位や身分を忘れ、この屋敷での夢のような時間を過ごしてもらいたいからよ」
それはまるで仮面舞踏会。
決め事の裏を察するならば、この屋敷に滞在する客人たちは、高い地位や身分の者たちなのかもしれない。
急な客人であるAとGを抜かし、正式な客人としてこの場にいるのはJである。歳は若いように思えるが、このJも何かの事業主か、あるいは跡取りなのだろうか。
ほかの客人――食事の前に癇癪を起こして立ち去ってしまったSという女。そして、まだ見ぬMという女。本人が資産家でなくとも、生まれた、もしくは嫁いだ家柄が良家である可能性もあるだろう。
そもそもこのような屋敷に住むマダム・ヴィーと親交がある時点で、それなりの地位や身分のある者たちなのだろう。本来ならばAやGがいることは場違いであり、なぜマダム・ヴィーは二人を客人としてもてなしてくれているのか。それは事故に遭った不幸な者たちだからか、それとも身分の違いなど関係ないという寛大な心を持ち合わせているのか。
しかし、これまでのマダム・ヴィーの態度から察するに、彼女は召使いたちを同じ人間だと思っていないのだろう。つまり彼女は身分の違いによって人を蔑む。たしかにAとGは召使いではないが、

実際にところはどう思っているのか。
Aはあまり食が進まなかった。不安が喉を詰まらせる。記憶を失っている上にこの環境、無理もないだろう。ワインばかりが進んでしまう。
マダム・ヴィーとJはたわいない談笑に華を咲かせている。一方、GはAよりも早くワインを空けていく。まるでその飲み方は水でも流し込むような勢いだ。
「そんなに飲んで平気なのか？」少し心配そうにAが尋ねた。
するとGは「なんだか傷が痛むんで、酒で紛らわせようと思ってな」と頬を真っ赤にしながら答えた。
傷とは頭の傷のことだろう。傷口がどの程度の物かわからないが、あの包帯の様子から見て、大きな怪我だったのかもしれない。
急にGが頭を振り子のように回したかと思うと、次の瞬間、食器やグラスを倒しながら大きな音を立て食卓に頭から突っ込んだ。
「おい、大丈夫かっ！」慌てて声をかけるA。
料理が散乱し、硝子や陶器の食器も割れ、溢れたワインもテーブルクロスに赤い染みを広げた。
何事かと場は騒然としたが――実際に慌てた様子を見せたのはAだけであったが、Gは自らの力で上体を起こし、少し悪びれた様子で平謝りをはじめた。
「すまん、すまん。少し飲みすぎたみたいだ」そう言いながら席を立ち、「先に部屋で休ませてもらう」軽く頭を下げて挨拶をすると、おぼつかない足取りで、すぐに駆けつけた召使いに肩を借りながら食卓を後にしてしまった。
Aも席を立った。
「友人が心配なので僕も失礼します」
理由をつけて食卓を後にした。
Gの身を案じているのは本当だが、それは記憶の鍵を握るのがGだからだ。
後を追ってすぐに廊下に出たつもりだったが、すでに人影もどこ

にもなかった。
広い屋敷だ、どこを探してよいのかもわからない。こんなことならば、先に部屋の場所を聞いておくべきであった。
当てずっぽうで歩き出してしばらくすると、「どこにおいでございますか？」と後ろから声がした。
今まで気配などしなかったのに、にも関わらず振り返るとフェイスマスクの召使いが立っていた。この召使いの声と背格好には覚えがある。おそらく二号だ。
「友人のGが体調を崩して、心配だから彼の部屋に様子を見に行こうと思ったのだけれど、どこに部屋があるのかわからなくて困っていたところなんだ」
不自然な理由ではない。だが、Aはあわよくばの酔いを覚まして、自分のことなどいろいろな話をするつもりであった。
この二号には記憶を失っていることを不意に打ち明けてしまったが、今考えると軽はずみな行為だったことは否めない。疑念――もはや疑惑ともいうべき、置かれている環境を考えると、こちらも不審な行動は悟られたくはない。すでに記憶を失っている話は、二号からマダム・ヴィーに伝わっているとも考えられるが、念を押した行動を続けるべきであろう。
二号はAの前を歩き出した。
「G様のお部屋はこちらでございます。ご案内いたします」
「それはありがたい」
Gの部屋は一階にあった。二階にあるAの部屋とは真逆の位置ともいうべき場所。
扉の前に立ったAはノックをした。
しばらく様子を見て待ったが返事はない。だいぶ酔っていたようなので、この程度では気付かないのかもしれない。
「おい、いないのか！」少し声を張り上げ、そのままドアノブに手を掛けた。だが、開かない。鍵が掛っているのだ。
そこで二号が、「もうお休みになられたのでしょう」

「たしかに……だいぶ酔っていたみたいだから、横になってすぐに寝てしまったのだろう」
焦ってはいけない。どうせ酔った状況ではまともな話もできなかっただろう。明日まで待とう。
「僕はこれから屋敷を少し見て回ろうと思う。ここまでありがとう、もう一人で大丈夫だから」
「ご案内しなくても宜しいのでしょうか？」
「いや、結構。少し見て回るだけだから、自分の部屋の場所もわかっている」
「そうでございますか。一つだけご忠告がございます。地下は古くなっていて、普段から使われておりません故、危のうございますから無闇に近づかぬようお願いいたします」
「ああ、気をつけるよ」
勘ぐってしまうのは致し方ないことだろう。そう、地下のことだ。考え過ぎかもしれないし、もしも何かあるとしても、どちらにせよ無闇に近づくことは好ましくない。
Ａは二号に別れを告げ、赴くままに歩きはじめた。
まだ夕食は続いているのだろうか。それならば、マダム・ヴィーと会話をするのもよいだろう。
食堂に向かう途中、サロンの横を通りかかると、猫脚椅子に座りながら優雅にティーカップを持つＪの姿が見受けられた。
向こうもＡに気付いたらしく、「どこに行くんだい？」と尋ねてきた。
「食堂にはまだマダム・ヴィーはいらっしゃいますか？」
「いや、もう彼女はいないよ。一度彼女を見失うと、どこでなにをしているのか、屋敷の中を探すのは大変だろうね。まあ彼女に用事があったのかもしれないが、あきらめてボクと少し会話でもどうかな？」
「たいした用事はなかったので……」そう言いながら、ＡはＪの近くの椅子に腰掛けた。

Ｊはテーブルに置いてあった空のティーカップに紅茶を注ぎはじめた。
「紅茶でよいかな？」
「はい」
「そう固くならずに、気軽に接してくれて構わないよ」Ｊは紅茶をＡの前に置きながら、口元に微笑みを浮かべた。
しかし……。
Ｊを見つめるＡの視線。
「ボクの顔になにか？」
尋ねられてＡは首を横に振った。「いえ、別になにも……」
マスクに浮かぶＪの瞳。はじめて会ったときには気付かなかったが、まるで何かを射貫くような鋭い眼。口元に笑みを浮かべ、柔和な雰囲気を醸し出しているが、眼のずっと奥にある『何か』が、『違う』と物語っている。
果たしてこの男は何者なのか。
何をしゃべろうかとＡが悩んでいると、先にＪが話を切り出した。
「この屋敷には多種多様な職や地位に就いている者が集まってくるのだけれど、君は普段なにをしているのかな？」
「それは……」
記憶にないことは答えられず、口ごもってしまった。
「すまない、この屋敷であれこれ人のことを詮索するのは御法度だったね。しかし、少しくらい決め事を破ったところで、別に構いはしないだろう。そうだね、ボクのことを話そうか」
Ｊのしゃべり口は実の饒舌であった。
自分のことに答えたくないこと、Ａの場合は記憶にないからなのだが、そういう場合は決め事を盾にすれば回避できそうだ。
紅茶で喉を潤してからＪは話を続けた。
「この屋敷に来る客人たちの中にはいけ好かない貴族たちも多いが、ボクは元々貴族の出身ではなくて、いわゆる成り上がりで財を築かせてもらった。主に貿易関係の仕事をしているのだけど、土地の売

買などもやっていてね。会社のほうはボクがいなくても軌道に乗っていて、このように悠々自適に過ごして居るんだ」
「この屋敷にはよく？」
「そうだね、一年のほとんどをここで過ごしているんじゃないかな」
ならば、おそらくこの屋敷のことについて精通しているはず。マダム・ヴィーともかなり親しい間柄の可能性もある。
次のAからの質問はすでに決まっていた。
「マダム・ヴィーとの付き合いも長いのですか？」
「いやいや、まだ三年ほどかな。ボクが知る限りでは、SやM女史のほうがマダムとの付き合いは長いだろう。なにせボクがこの屋敷を訪れるようになったころには、すでに屋敷に住んでいたみたいだからね」
滞在しているのではなくて、住んでいる。ただの客人ではないのかもしれない。
Sはすでに会ったが、Mについてはまったくと言って情報がない。
「まだMとはお会いしてないのですが、どのような方で？」
「あまり自分のことを語りたからず、人と関わることも好きでないらしい。ボクもあまりしゃべったことがないね。本人に会って見るのがよいよ」
「そうですか」
機会が会ったら話をしてみよう。
今は周辺の人間たちよりも、この屋敷の主を先に知る必用があるかもしれない。
「マダム・ヴィーについて詳しく知りたいのですが？　このような屋敷に住み、いったい何者なのだろうかと」
「ふふっ」Jは少し笑った。「この屋敷ではあまり人のことを詮索するべきではないよ。とは言うものの、ボクはそういうのが嫌いじゃない。ここだけの話だよ」と言って、Jは唇の前で人差し指を立てた。
Aは息を呑んで深く頷いた。

するとJは今まで以上に饒舌に語り出した。
「マダム・ヴィーというのはもちろん偽名、召使いたちにはお館様と呼ばれているのは知っているかな？」
「ええ」
「まるでこの館の主であるがごとく振る舞い、客人たちもそう思っているだろう。しかしね、実際のところを言うと、彼女はただのマダムに過ぎない。この一帯を治める領主の夫が存在していて、その者こそが正当なこの屋敷の主であり、絶対権力者なのだよ。ボクは領主Xと呼んでいるが、そのベールは謎に包まれている……マダム・ヴィーの素顔のようにね」
「主が別にいる……」
「しかし、領主Xについてはあまり口に出さない方がよいだろう、特にマダム・ヴィーの前では」
「どうして？」
「理由はわからないが、領主Xの存在自体を隠蔽したいらしいことは間違いないね」
なぜ、Jはここまで知り得ているのか、疑念が浮かぶ。
「まさか貴方はマダム・ヴィーの愛人なのでは？」
「あはは、まさか。私がマダム・ヴィーの愛人？　とんでもない、彼女と付き合えるのは悪魔だけさ」
口元は戯けたように笑っているが、マスクの奥にある瞳は冷たい視線を放っていた。
記憶を失ってから、信じるべきことがなにかわからない。言葉など、嘘をつくのはたやすい。
そう言えば、何もない可能性もあるが、あのことも聞いておこう。
「この屋敷の地下にはなにがあるか知っていますか？」
「さて……なにがあるんだろうね。見てはいけない『モノ』があるのかもしれないよ、ふふふっ」
その口ぶりは何か知っているのかもしれない。やはり、Jはこの屋敷の内部事情に精通しているらしい。

急にＪが熱っぽい視線をＡに向けた。
「さて、ボクはいろいろ話したよ。今度はキミの番だよ、ボクはキミのことをもっとよく知りたいな」
忍び寄ってきたＪの手が、Ａの手に軽く触れた。
異様な雰囲気がした。
Ｊの顔がすぐ目と鼻の先まで近づいてくる。
驚いたＡは席を立った。
そして、自分を見つめる視線がＪだけでないことに気付いた。
いつの間にか柱の陰に立っていた二号の姿。まさか、監視されているのか。
さらに、もう一人。
車椅子に乗って現れたルージュの貴婦人――マダム・ヴィー。
まるで何かを思い出したように、「そろそろ僕は部屋に戻ります。それでは……マダム・ヴィーも失礼します」Ａは逃げるようにこの場を後にした。

死の舞踏

紅い口紅で描かれた夢物語。
仲むつまじい家族の情景。
父と母の間に挟まれ、両の手を優しく繋がれた幼い子の姿。
そこへ現れる一匹の魔獣。
炎を身に纏う魔獣が、紅玉の眼を輝かせながら、全てを呑込んでしまう。
嗚呼、どこかで舞踏会の音楽が聴こえる。

「……夢……を見ていたのか？」
ベッドに横たわりながら、Ａは天井を眺めた。
記憶は未だ戻らず、今見たばかりの夢のことすら思い出せない。
そう言えば、昨日も夢を見たような気がする。おぼろげに、どちらも嫌な夢であったと、微かに不快感が残っているのみ。
マスク……そうだ、昨日はなぜか部屋に戻ってきた途端に睡魔に襲われ、このマスクを外すことすら忘れていた。今ならば誰も見ていない。
隠された素顔。
もしも、素顔を見たとき、なにも思い出せなかったら？
恐ろしい、それほど恐ろしいことがあるだろうか。それならば、いっそのことマスクを外さない方がよいのではないか。
しかし、内から沸き上がる衝動を抑えることは出来ない。
なにか、そう、鏡になるような物はないだろうか？
生憎、この部屋には鏡やそれに属する物はない。ご丁寧なことだ、それほどまでに素顔を見せたくないのか。やはり、見なくてはならない。
窓がある。夜ともなれば鏡の代わりになるが、まだ陽が高く映りが悪い。だが、微かに写るその姿でも……見たい。

Aは窓の前に立ち、マスクに恐る恐る手を伸ばした。
「なぜだっ！」
嗚呼、なんということだ。Aは叫び声を上げた。
想像もしていなかった。
マスクが、マスクが外れないのだ。
まるで皮膚の一部となってしまったかのごとく、外そうとしても痛みが走るほどに密着している。
「どうして、どういうことだッ！」
やはり、これは決定的だと言わざるを得ない。
疑念が確証へと変る。
ただ、それは悪意なのか、敵意なのか、それとも別の何かか。
「崖から落ちただと……信じられるかそんなこと。どうして僕は記憶を失ったんだ！」
Gに話を聞く必用がある。あの男はいったい何者なのだ。あの男だけではない、この屋敷にいる全ての人間だ。
崖から落ちて気を失ったというのに、無傷というのも信じられない。怪我をしたというGのあの包帯も偽装ではないか、全て作り話なのではないか。
嘘偽りならば、そこには理由がある筈だ。
「……落ち着け」
そう、慎重にならなくてはいけない。
“相手”の目的がわからぬうちは、軽はずみな行動は控えなければ。
Aは着替えを済ませ、平静を整えると部屋を出た。
まずはGの部屋に向かうことにしよう。もう昨日の酔いも覚めている筈だ。
廊下に出てしばらく歩き、階段まで差し掛かると、テラスの方から何やら騒がしい音が聞えてきた。
不審に思いながら階段を下りずにテラスへ向かうと、騒がしさは下から聞えてくるようだった。身を乗り出して庭を覗くと、そこに

は――。
「……まさか」
地面に不自然な格好で横たわるGの姿。
その近くには召使いたちやJが人だかりとして集まっているようだった。明らかに事故の様相を呈している。
「いったい何があったんだ！？」
Aの声に気付いてJは、シルクハットを傾けテラスに顔を上げた。
「事故のようだね。可哀想にすでに死んじゃってるよ」
「死んでるだって！？」
驚きのままAはテラスを後にして、わき目もふらずに現場へ駆けつけた。
テラスの真下はエントランスを出てすぐの場所だ。つまり、外に出掛けるか、もしくは訪問者があった場合、嫌でも目につく場所。
Gは石床に仰向けで倒れていた。後頭部の辺りから血が出ているのか、頭は朱の海に沈んでいる。そして、顔はハンカチで隠されていた。
「このハンカチは？」
Aが尋ねるとすぐにJが返した。
「ボクが置いた物だよ、あまり良い死に顔とは言えなかったものでね」
果たしてどのような死相を浮かべているのか？
恐る恐るAはハンカチを捲り上げ、その形相を確認した。
「……っ！」
思わずたじろぐA。
いったい彼は死に際に何を見たと言うのだ。まるでそれは悪魔でも見たかのような醜悪な形相で死んでいた。
「なんでこんなことに……」Aは沈痛な表情で頭を抱えた。
「さあ、だいぶ酔っていたようだから、それで誤ってテラスから転落してしまったのだろうね」Jはそう言うが、この形相はどうやって説明するのだ？

ほかにも少し疑問な点がＡにはあった。
「発見したまま誰も動かしていないのですか？」
「ボクが第一発見者だけど、ハンカチを掛けただけでほかは一切いじっていないよ。それ以前のことは知らないけどね」
屍体を発見して、周りに知らせたのはＪだったらしい。
うつ伏せではなく、仰向けの屍体。酔っていて落ちたのだとしたら、どのような格好で転落したと考えても不思議ではないのだが……。
「警察には知らせたのですか？」尋ねながらＡは周りの人々を見回した。
「そんな必用がどこあって？」
マダム・ヴィー、そのルージュから発せられた言葉だった。
今日もその素顔を隠し、ただ一箇所――魅惑的な唇だけがこの世界に姿を見せている。
自ら日傘を差すマダム・ヴィーは、召使いに車椅子を押させ、すぐ屍体の近くまでやって来た。
「嗚呼、なんという悲劇。転落事故から奇跡の生還をしたというのに、まさか酔って身を滅ぼすとは……可哀想な“事故”」
まるで舞台女優のように、マダム・ヴィーは芝居がかった仕草と口調で悲しんで見せた。それがＡには引っかかって仕方がなかった。
「しかし、事故だとしても警察に連絡する必用はあるのでは？」
「おほほほっ、人里を離れたこの屋敷まで、ただの事故で警察にご足労を掛けるなど申し訳ないわ。事を大事にする必用など、どこにもないのよ。わたくしが責任を持って手厚く埋葬いたしますわ」
「しかし、彼は僕の友人であって――」
Ａの言葉を遮るようにＪが割り込んできた。
「マダム・ヴィーがそうおっしゃるなら、すべてお任せしようじゃないか。ボクらは客人なのだから、面倒なことをする必用はないさ」
「……」
押し黙ったＡは孤独を感じた。Ｊがマダム・ヴィーの肩を持った

ように感じたのだ。
やはり誰も信じることはできない。
言葉や行動などいくらでも偽れるのだ。だとするならば、Aはもう少しGの屍体を調べたかったのだが。
「さあ、早く屍体を片付けて頂戴」主人の命令によって、召使いたちが素早く屍体を運んで行ってしまった。そのときの口調は、まるで“邪魔よ”と言いたげなものに感じられた。
AはGの死に不信感を持っていた。決め手となる理由はないが、この屋敷でのことすべてが疑わしいのだ。故に、なにが起きても不信感を抱いてしまう。例え本当に事故死だったとしてもだ。
なにを信じていいのかわからない。その中で、Gの言葉が本当だったとするならば、Aの正体を知る人物を失ってしまったことになる。これは大きな痛手である。
Gの死というあまりの衝撃で、大事なことを忘れていたが、Aはあのことをマダム・ヴィーに問い詰めることにした。
「マダム・ヴィー、お尋ねしたいことがあるのですが？」
「なにかしら？」
「この仮面のことなのですが、なぜ皮膚に密着して外せないのですか？」沸き起こる感情を抑え、冷静に淡々と尋ねた。
マダム・ヴィーの口元が笑みを湛えた。
「外す必用などないわ」
「必用があるないではなくて、僕が聞いているのは、僕に断りもなく顔に仮面を貼り付けるなんて、酷いとは思わないのですか？」
「ご自分の立場を理解していて？　貴方は客人、この屋敷の主はこのわたくし。郷にいれば郷に従うのが礼儀でしょう。ご安心なさい、この屋敷から立ち去るときに外して差し上げるわ」
立ち去るとき……それはいつになるのか。このまま立ち去ってよいものだろうか。
Gは死に、Aの記憶も戻らない。果たしてAの取るべき行動とは？
「失礼しました。目が覚めたら突然この屋敷にいて、戸惑いや不安

も多く、仮面が外れないことに驚いてしまい、このまま一生外せないのではないかと考えたら頭が混乱してしまって。そうです、友人の突然の死も心身ともに堪えているのでしょう。この屋敷の主であるマダム・ヴィーに物言いを付けるような真似をして、大変申し訳なのことをしてしまいました」

そして、Aはマダム・ヴィーの足下に跪き、深く頭を下げた。

今はこれでいいのだ。穏便に済ませて機会を狙う。何かを探るにしても、機嫌を損ねた相手の口は固く閉ざされてしまう。だから今は、そう、これでいいのだ。

マダム・ヴィーの口元は嘲笑を浮かべているようだった。

「そこまでなさらなくても宜しくてよ。この屋敷の主が誰であるか、それをご理解いただければ」そう言って車椅子を反転させ、「それではわたくしは失礼するわ。日差しの下は苦手なもので」

召使いに車椅子を押され、マダム・ヴィーは屋敷の中へと帰っていく。

すでに召使いたちが血痕に水をまいてブラシで削り取るように擦り取っている。玄関ということも考えれば、早急な処理が必用なのはわかるが、Aにしてみれば証拠までも消えていくような気がした。

Aとマダム・ヴィーのやり取りの一部始終を見ていたJは、「この屋敷に自らの意思で来る者たちは、マダムに対してキミのような口の利き方はしないだろうね、怖い怖い」

「逆らうとなにかありますか？」

その問いには答えず、JはGの屍体があった場所に顔を向け、すぐに再びAに顔を向けると、にやりと口角を上げた。

なにが言いたいのかは明らかだ。

しかし、それを示唆すると言うことは、JもGの死について……。

「ゆっくりと二人で話しませんか、Jさん？」

「キミから誘ってくれるなんて嬉しいね。しかし、残念だなぁ、急ぎの用があるんだ」

「急ぎの用？」

「いやいや、たいしたことはないさ。それでは失礼するよ」
ステッキを手にしたＪは優雅な足取りでこの場を去っていった。
急ぎの用とはいったい何か？
シルクハットを被り、ステッキを持つ姿は、出掛ける装いだったからだろう。自然な流れを想像するならば、出掛ける身支度を済ませて屋敷を出たところで、Ｇの屍体を発見したと考えるのが筋の通る考えだ。急ぎの用と言えど、屍体を発見してしまっては足止めをされたのだろう。
しかし、この考えは“急用の理由”に繋がるものではない。
理由には繋がらないが、この考えが重要であるとＡは考えていた。なぜならばＡはしかと、その眼で見たのだ――Ｊが屋敷の中に入って行ったのを。
酔って転落をしたのならば、その前提すらも偽りである可能性もあるが、もしも酔いも覚めぬ夜に転落したとするならば、玄関を“出る”ときにしか通常では屍体を発見することはないのだ。つまりそれが意味することは、Ｊが屋敷の中に入っていったのは、やはり不自然とであるということだ。
たしかにＪは出掛けようとしてたのだろう。だが、それは急用ではないかもしれない。中に入っていった行為、それが急用なのだ。その仮定を建てるならば、出掛ける予定が妨げられた点から急用だと言い出すまでの点の間、そこで“急用”が生まれたことになる。
直感的にＡは“急用”とはＧの死に関係することだ感じた。
すべては仮定の話である。
証言ではなく物証を見つけ出さなくては真実は見えてこない。
ＡはＪを探そうと屋敷の中へ戻った。

探索

すぐに追いかけたつもりであったが、Ｊの姿は煙のように消えてしまっていた。屋敷は広い、無闇に探して時間を費やすだけだ。その時間はどのくらい残されているのだろうか。

記憶を取り戻すまでの時間、屋敷を後にするまでの時間、果たして制限時間は存在しているのだろうか。

目下の目的は記憶を取り戻すこと。それに必要な疑問や疑惑を紐解く行為。近くまで伸びている紐は、Ｇという男だろう。

Ｇから伸びた答えまでの紐は途中で切断された――死という行為によって。

しかし、伸びていた紐は一本ではあるまい。

Ａはすぐに Ｇの部屋に向かうことにした。

昨日は鍵の掛かっていたＧの部屋だが、今は開いている。Ａは静かに部屋の中へ忍び込んだ。

部屋の中はＡの部屋とほぼ同じ、備え付けの家具が置かれている。変わったところ、もしくはＧの所有物を探すべきだろう。

すぐに不審な物が見つかった。無造作に置かれた麻袋。中を調べようとした時、Ａの背後から女の声がした。

「ここで何をしていらっしゃるのですか？」

Ａは背筋に冷たいものを感じながらもそれを隠して、落ち着き払いながら振り返った。

「友人の形見の品を探そうと思って」

すんなりと自然な言い分が口から出た。それで相手が納得したかは別だが。そこに立っていたのは二号だった。

「ですが勝手に触られては困ります」

「なぜ？」

困る理由がどこにある？

もうすでにＧは死んでいる。それがただの死であるならば、困る

理由などどこにもない。
「お館様に部屋の片付けをするように仰せつかっております」
二号の立場からすれば、マダム・ヴィーに背くこと自体が困る理由になり得るだろう。では別の者に困る理由があるとすれば、それを探る為の言葉、さらにこの場から人払いをする言葉をAは探した。
「マダムにお伺いして来てくれないか、私には友人であるGの所有物を譲り受ける権利がある。彼の残した品々をその友人や家族に渡す義務もあるだろう。Gの形見を今ここで確認したいのだがどうだろうか？」
おそらく二号は何事も決める権利を有してはおらず、自分よりも立場が上――マダム・ヴィーの言いつけに忠実に行動する筈。これまでの事を見ていればわかる。
「わかりました、しばらくお待ちください。ただし、この部屋にある何一つとて触らぬようお願いいたします」
二号はそのまま部屋を出て行こうとしたが、途中で振り返り、そして再び背を向けて部屋を出て行った。
これでもしもマダム・ヴィーがGの遺品に手出しをしないように言ってきたら、それは疑惑の色を濃くすることになる。
少し間を置いて、二号が帰ってこないことを見計らって、Aは先ほどの麻袋の中身を確認した。
中には見覚えのある中折れ帽子が入っていた。明らかにGが被っていた物だ。
この帽子はどこにあった物だろうか？
そう言えばGの屍体の近くにはなかった。
ならば転落した際に取れたとしても、騒ぎを聞いてAがまず向かったのは、その現場であると思われるテラスだ。そこにも帽子はなかった。
ごく自然に考えるならば、二号はこの場所の片付けをしていたわけだから、この部屋にあったと考えるのが打倒だろう。
しかし、そう考えると新たな疑問が浮かぶ。

部屋の扉が開く音がした。
Aは慌てた。こんなにも早く二号が帰って来るとは思っていなかった。
「おや、こそこそと泥棒の真似事かい？」
そこに立っていたのはJであった。
Aは麻袋を投げ捨てて、落ち着き払うことに勤めた。
「私は友人の形見を整理していたんだ。赤の他人の持ち物を漁っているわけではありません。泥棒などと言われるのは心外です」
「ならばもっと堂々としていればいい。目が動揺しているよ」
「誰かが部屋に突然入ってくれば驚くのは当前でしょう。あなたこそなぜこんな場所に？」
Jがこの場所に現れた理由がもっとも不透明だ。
「ボクは散歩の最中さ。そしたらこの誰もいないはずの部屋から音が聞こえてね。不自然に思い入って来たわけだよ」
物音などした筈がない。Aの行動は慎重であったし、麻袋から帽子を取り出しただけだ。
AはJを追求しようとも考えたが、相手を突くことは自分も突かれることになりかねない。
「ではあなたの疑問は解決されたわけですね」
「この部屋に入ったら、キミがGの遺品を整理していた。それが答えだろうね」
「私はこのまま友人の形見を整理しますので」
用事が済んだのならば、部屋を出て行って欲しいと暗示したつもりであったが、Jは出て行く気配を見せることなく、あろうことか部屋の中を物色しはじめた。
やはりJの目にもついたのは麻袋のようだ。
「これはGの帽子だね。事故現場にはないから不思議に思ってたんだ」
「なぜです？」
「彼は痛ましい怪我を隠すために室内でも被っていたんだよ。事故

の時も当然被っていただろうね。部屋の外で事故に遭ったわけだから」
「酔っていて忘れたのでは？」
「酔っていたということを考慮に入れたら、どんな不可思議なことも不可思議でなくなってしまうね」
可能性は答えではない。
そこへ二号が帰って来た。少し早いような気もする。
「手を触れないようにとお願いした筈ですが？」
苛立ちというよりも、何らかの畏怖がその声音から感じられた。
Aが言い訳を考えるよりも早く、Jが口を開く。
「ボクはお願いされてないけど？」
今現在、Aは何にも触れておらず、部屋を物色しているそぶりを見せているのはJだ。
そのことに気づき、二号には反論の余地はなかったが、「ではJ様にもお願いいたします。この部屋の物には触れないでください」
改めて触れるなという文言を付け加えると言うことは、マダム・ヴィーの許しがもらえなかったとと理解するべきか。
確認のためにAが尋ねる。
「Gの形見を確認したいという私の申し出はどうなった？」
「お館様がいらっしゃらなかったので尋ねることはできませんでした」
「ならば改めて確認を取るまで、部屋の片付けを後にしてもらいたいのだが？」
「わたくしはお館様の言いつけを守るのみでございます。新たな言いつけがない限り部屋の片付けをやめることができません。お二人とも早々に部屋を出て行ってください」
Jが麻袋を漁っている姿を見られたのが決定的に不味かったのだろう。AとJは無理矢理、二号に背中を押されて部屋の外に押し出されてしまった。
少し不満そうな眼でAはJを軽く睨んだ。

その視線に気づいたＪは「ボクが何かしたかい？」と白々しい態度だった。
「あなたのせいで私まで部屋を追い出されてしまった」
「それは違うね。あの奴隷の機嫌を損ねたのはボクに責任があるかもしれないが、どちらにせよあの部屋を追い出されていたのは間違いない。奴隷は主人の命令に忠実でなければならないから、部屋の片付けに邪魔なボクら二人を追い出すのは当然だろう」
言い分は正しい。新たにマダム・ヴィーから言いつけがない限り、あの場にＡは不要の存在である。
Ｊは「そう言えば形見がどうとか言っていたね」と言いながら、おもむろに懐から腕時計を取り出した。「Ｇの時計だ、キミが持っているといい」
驚きを隠せないＡ。
「なぜあなたがＧの時計を？」
「少々手癖が悪いだけさ。その時計がなくなったという些細なことに気づいている者は誰もいないと思うよ」
「どこでこの時計を？」
「時計をよく観察してみるといい、それが質問の答えさ。それではボクは散歩の続きをするとしよう。ではごきげんよう」
軽快な足取りでＪは姿を消した。
Ａは受け取った腕時計を観察した。一目で文字盤を保護する硝子板が割れていることに気づき、針が時を止めていることにも気づいた。その時間は七時四十七分。
質問の答えはこの腕時計にある。観察しろと言った以上はそこから導き出されること、おそらくはおそらく時計が壊れた状況にあった場所が、手に入れた場所なのだろう。
そうなると時を止めた意味が重要性を帯びて来るではないか。
Ａは衝撃を覚えつつも、昨晩のことを思い出した。
夕食がはじまったのは七時ちょうど。だとすると壊れた腕時計が示す時刻は、ＡとＪがサロンで会話をしていた時か、もしくはそれ

以降か。おおよそあの辺りの時刻であろう。
サロンをあとにしたAは、階段を上り自分の部屋に向かう途中、テラスの近くを通った筈だ。
「よく覚えてない」
昨晩は部屋に戻った途端、急激な睡魔に襲われた。その前から少し意識が途切れがちだった。
あの異常さを今から考えると、食事に何か薬が混ざっていたのではないかと勘ぐりたくなる。
Aは再び記憶を廻らせた。
Gが食卓を後にしてから、時計が壊れるまでの時刻の間。Aは一度Gの部屋を尋ねている。それもGが食卓を後にした直後のことだ。
あのとき、Gは本当に部屋にいたのだろうか？
ノックや呼びかけに応答はなく、部屋には鍵が掛かっていた。
もしも部屋に戻っていなかったら？
そうなると道理が通ってしまうことがある――酔い覚ましにテラスに出て転落したということだ。
わざわざ一度部屋に戻ってから、それも呼びかけに反応もできないほどの状態であったとしたら、そのあとにわざわざ部屋を出て、一階の自室から二階のテラスに行くような真似をするだろうか。逆にはじめから部屋に戻っていないとするなら、なんら不思議なことでなくなる。現に食堂でも転倒しそうになっていたほどだ。
しかし、Aはただの事故だとは思えなかった。
疑惑や不審な点はいくつもある。ただ決定的な証拠は見つかっておらず、考え過ぎと言ってしまえばそれで終わってしまう。だが、Jの存在が何かあると如実に語っている。
屍体の第一発見者とされるJ。おそらく腕時計を取ったのもその時だろう。そのあとのJの行動、急用と言いつつ屋敷に入り、のちにGの部屋に現れた。Gに関連する何かを探っていると考えるのが自然だ。
何もないのに腕時計をわざわざ屍体から外すか？

その場に立ち尽くしAが考えにふけっていると、Gの部屋から二号が出てきた。
「まだこんなところにいらっしゃったのですか？」
二号は麻袋を持っていた。あまり荷物が詰まっているようには見えない。事故に遭って屋敷で保護されたという話が本当なら、元々の荷物が少ないの当然だろうが。
「やはりその袋の中身を確認するわけにはいかないのか？」
「わたくしにはその権限がございませんから」
二号の声音は硬かった。
会釈をして立ち去ろうとする二号をAは呼び止めた。
「待ってくれ、Mに会いたいのだが部屋を教えてくれないか？」
「すぐ目の前の部屋がそうでございます」
二号が指で示したのはGの部屋の正面だった。
そして二号は足早に姿を消してしまった。
この屋敷に滞在すると言われている者でまだ見ぬのはMと呼ばれる女。Jは“良い淑女”と称していた。
さっそくAはMの部屋をノックするが、反応はなかった。
再びJの言葉を思い出す。彼が言うのにはMは部屋にこもっていることが多いという。留守かそれとも居留守か。
念のためもう一度、今度は強く扉を叩いてみたが、やはり反応はなかった。
諦めて場所を移動しようとしたAの前から、廊下を歩いてこちらにやって来る女の姿。
Sは苛々とした様子で歩き、Aと眼が合うと鋭い視線をした。
「何見てんだい、げす野郎！」
いきなり激しい物言いだ。昨晩もこのような感じであったが、普段からずっとこのままなのだろうか。
ここで出会ったのだから、AはSにも話を聞くことにした。
「私の友人のGが亡くなったのはご存じですか？」
「崖から落ちても死ななかったのに、酔っぱらってテラスから落ち

て死んだんだろ。キャハハハハ馬鹿な野郎だ！」
高笑いを響かせながらSは部屋に入って行ってしまった。まったく話にならない。
Sが入ったのはMの隣の部屋だ。角部屋にあるGの部屋、その向かいにあるMの部屋、Sの部屋はMの部屋の隣だ。三人の部屋は同じ場所に集中しているが、Aの部屋は二階の角部屋だ。
「隔離されていると感じるのは考え過ぎか……」
呟きながらAは歩き出した。

闇からの呻き声

屋敷で意識を取り戻して、まだ二日。知らぬ場所の方が多い。屋内ではなく、屋外の庭となればなおさらのこと。

Aは玄関を出て庭の散策をすることにした。

玄関にはすでに人ひとりいなかった。そこに残っていたのは清掃で撒かれた水の跡。証拠などまったく残っていそうもない。

早々にその場からAは移動することにした。

広い屋敷だが、その庭はさらに広い。玄関から遠く先に塀が見て、そこをなぞるように視線を動かすと、巨大な門が見えた。どうやら門は固く閉ざされているようだ。

玄関正面から門までの道は庭園と呼ぶに相応しく、噴水から迸る飛沫が水路へ流れ続いている。そして、目に飛び込んでくる一面の紅い花。

風に運ばれてくる花の香りは甘美で、少し意識が遠くなるような気がする。

Aは早足で歩きながら巨大な門までやってきた。

近くで見る巨大な門は圧倒的であった。その大きさは五メートル以上。重厚感のあるその金属製の門には、禍々しい装飾が施されており、よく見るとそれは悪魔や悪鬼を模った物だった。

門にはこちら側に左右に二つの鍵穴があった。

Aは冷たい門に両手を押し当て押してみたがびくともしない。さらに肩を押しつけて、全体重をかけてみたが結果は同じ。鍵が掛かっているのか、掛かっていなかったとしても、この見るからに重い門はひとりの力では到底開かないだろう。

諦めてAは塀に沿って歩き出した。

塀の高さは門と同様、よじ登ることなどできない。さらに塀の上にはかぎ爪のような鉄柵が取り付けられている。しかも、そのかぎ爪は外ではなく、内に向かっているではないか。それの意味するこ

とは容易に察しがつく。
Aは苛立ちを覚えながら塀に沿って歩いた。
どこまでも続く塀。
やがて屋敷の裏までやって来たところで、異臭が鼻を突いた。
花が咲いていた。
それは表の庭に咲いていたものとは違う、どこか妖しげな紅い花。
花を咲かせているものはまばらで、その多くは不気味な実をつけていた。
茎の先端に実る卵のようなそれはおそらく「この実は……ケシ畑か」。
ケシの実から抽出される乳液はアヘンの材料となる。そのアヘンからモルヒネ、さらにはヘロインが生成される。
Aは袖で鼻を覆いながらその場を足早に立ち去った。
そして、庭の隅に見えてきた焼却炉。
焼却炉はまだ何かを燃やしているらしく、煙突から舞い上がった灰がAの足下まで落ちてきた。
さらに焼却炉の周りを調べて見ると、少し焦げた布の切れ端が見つかった。その布にはボタンがついており、服か何かではないかと思われた。
「まさか……」とAは呟き、嫌な予感を脳裏に過ぎらせたが、その考えはすぐに掻き消した。
煙の臭いに変わった点はない。肉を焦がしたような異臭はしなかった。
人の気配がする。Aはすぐさま苗木の陰に身を潜めた。
巨漢の男が巨大な麻袋を担いでこちらにやって来る。
近くまでやって来たその大男の顔は死人のように青白く、目の下の隈やいたることにある皺が疲弊感を醸しだし、額を横に走る手術跡が不気味だった。
大男はAに気づかずに横を通り過ぎ、さらに先にある井戸らしき場所で足を止めた。そして、麻袋の中身を井戸の中へ放り投げた。

思わずAは息を飲んだ。
一瞬見えたあれは、たしかに人のようであった。麻袋に入っていたのは人だ。それが今目の前で、井戸の中へ投げ捨てられたのだ。
しばらくして大男が姿を消したのち、Aは恐る恐る井戸に近づいた。
一見してそれは井戸のように見えるが、その直径は通常の井戸よりも遙かに大きい。まるでそれは地獄に続く大穴。底は暗闇に呑み込まれてしまっている。
焼却炉では脳裏を過ぎった考えをすぐに掻き消したが、ここではどうしてもそれが消えない。
投げ込まれた人は誰だったのか？
遠く離れていた為、それを確認することはできなかった。もしかしたら人ではなく、ただの人形だったかもしれない。
Aは荒くなる呼吸を落ち着かせながら、井戸の縁に手を掛けて中を覗き込んだ。
どこまで続いているのか、光すら届かない井戸の底。
急にAは背筋を冷たくして体を強ばらせた。
呻き声。
微かに呻き声が聞こえたような気がした。
もしも投げ込まれたのが……だったとして、死者の呻き声が聞こえたとでも言うのか。それとも別の者の声か？
「誰かいるのか！」
井戸の底に向かって叫ぶが返事は返ってこなかった。
呻き声に聞こえたものは風の悪戯だったのか。
Aは逃げ出した。この場所に一秒たりとも居たいとは思わなかった。
冷や汗をかきながら屋敷の中へ戻ってきたが、この中ですら居たいとは思わない。
今はこの場所が魔の巣窟に思えてならない。
いったいこの屋敷で何が起きているのか？

記憶を失い目覚めた場所は異質な決まり事で縛られた屋敷。その屋敷でお館様と呼ばれる謎の女主人マダム・ヴィー。取り巻く異質な奴隷たち、そして癖のある客人たち。

一刻も早くこの屋敷からAは出たいと願ったが、それをマダム・ヴィーに申し出たところで、容易に受け入れられるだろうか。おそらくそう簡単にはいかないだろう。

屋敷の中へ戻ってきたAだったが、やはり中にいることも躊躇われ、またすぐに外へ飛び出してしまった。

玄関を出てすぐの場所に残っていた水跡も、すでに跡形もなく消えてしまっていた。

Gの持ち物も処分され、その遺体も今はどこにあるかわからない。この屋敷からGの痕跡が消え、まるでいなかったことにされてしまうような。Aはそのことを考えながら恐怖を覚えた――自分もいつかは消されてしまうのではないかと。

この場所から逃げ出す方法を模索する。

門からの脱出は難しいだろう。鍵を手に入れたとしても、やはりあの重さが問題になる。

塀は高く、その上にはかぎ爪の柵が取り付けられているが、梯子があれば越えられないこともないだろう。梯子の一つくらい屋敷のどこかにありそうだ。

物置のような場所が屋敷の部屋の一つにあるか、それとも庭に小屋があっただろうか。

先ほどまで庭を散策していたAだったが、塀に沿って半周ほどしただけで、引き返してしまった。まだ広大な庭に何があるか把握していない。

Aは屋敷にある部屋を思い出した。

今のところ把握している場所は、いくつかの客間と、食堂とサロン。おそらく半分にも満たないほどしか行っていない。マダム・ヴィーの部屋すらどこにあるのか知らない。

マダム・ヴィーの部屋はどこにあるのか。

車椅子であることを考えると一階にあるような気もするが、それらしき部屋は今のところ見当たらなかった。二階もAの部屋は角部屋であり、テラスや階段を挟んだ向こう側にはまだ足を運んでいない。

そして、前々から言われていた地下室の存在。

地下室には不用意に近づかないようにとの旨を伝えられているが、地下に降りる階段がどこにあっただろうか。

Aは考えを廻らせながら屋敷の全容を眺めた。

玄関をすぐ出た場所からでは、首を大きく動かなければ眺めることはできない。

屋敷を眺めながらAは足を運んだ。

そして、ふと一階の窓へ目をやったとき、カーテンの隙間からこちらを見る人影に気づいた。

人影が誰かははっきりしない。ただ、あの部屋は確か……Mの部屋だ。そのことに気づいたAはすぐさま部屋の中へ引き返し、Mの部屋へと急いだ。

まだ会ったことのないMと呼ばれる女性。

部屋の前に立ちAは扉を力強く叩いた。反応はない。これは前に来たときと同じだ。

しかし、今は部屋の中に何者かがいるに違いなかった。

Aは激しく扉を叩いた。

「部屋の中にいることはわかっています。顔を見せてはくれませんか！」

もしかしたら入れ違いになったことも考えられなくもないが、Aはここまで極力急いで来たし、すれ違った人も誰ひとりとてしなかった。

さらにAは強く扉を叩いた。このまま扉を壊してでも中に入るような気迫だった。

「M女史、貴女に人目お会いしたい。ご存じかもしれませんが、昨日まで僕は意識を失いこの屋敷の一室で寝ておりました。昨日やっ

と目を覚まし、ほかの客人にはお目通りしたが、貴女にはまだお会いできておりません！」
扉越しに言葉を投げかけるが反応はなかった。
仕方がなくAは諦めて引き返そうとしていた時に、扉の鍵が開く音がした。
すぐさまAは振り返って扉の前に立った。
すると、少し開かれた扉の隙間から、蒼いベールに包まれた目元が覗いた。
「何かわたくしにご用ですか？」
落ち着いた、まるで小川のせせらぎのように澄んだ声音。
先ほどまで何かに駆り立てられていたAだったが、急に落ち着きが戻ってきた。
「僕はこの屋敷ではAと呼ばれています。貴女がM女史でしょうか？」
少し答えるまでに間があった、「ええ、このお屋敷ではそう呼ばれておりますわ」
いざ会って見るとAは何を話していいのかわからなかった。会うことばかりに執着していた。
「少しお話があるのですが、Gが亡くなったのはご存じですか？」
その問いを聞いて、ベールの奥の瞳が大きく見開かれた。「いえ、今初めて……部屋からあまり出ないもので、人との会話も日に二言三言、世話係の者とするくらいなものですから」
部屋から出ないということは、先ほど訪れた時には居留守を使われたのか。
そこのことよりも、人が死んだというのに誰も伝えに来ないとは……来たのかもしれない。その時も居留守を使った可能性がある。
Mは警戒しているのか、未だに扉は少しだけ開き、そこから顔を出している状態だ。会話が途絶えたらすぐにでも扉が閉まりそうな雰囲気さえある。
「Gはテラスから転落して死んだようです。それについて何かご存

じではありませんか？」
「先ほども申したとおり、今初めて聞いた話ですので」
「では今までGとどのような会話をしましたか、たとえば僕のことなど聞いていませんでしたか？」
「いいえ、Gさんとは挨拶を交わした程度ですので。なに分、部屋の中にいることが多いもので」
この屋敷に何度も訪れたことのあるJですら、あまり会話をしたことがないと言っていたほどだ。
Aは会話が途切れないようにすぐに新たな質問をする。
「つかぬ事をお伺いしますが、なぜ部屋に籠もりきりなのですか？」
「それは……あまり体が強くないもので。人を接することも苦手ですの」
蒼いベールで隠された素顔。目元を見る限りでは不健康そうには見えないが、それ以上のことは伺い知れない。
ほかの質問はないかとAがほんの少し考えている間に、Mのほうから口を開いた。
「もう宜しいですか？」
扉が少し閉まりかけていた。
慌ててAは、「この屋敷に長く滞在していると聞きました。なぜですか？」
その問いかけにMは答えなかった。
しかし、「お入りなさい」と扉を大きく開いたのだ。
導かれた部屋の作りはAやGの部屋とあまり変わらない。違う場所と言えば、本棚とそこに納められた大量の本だろうか。
「お掛けになって」MはAに席を勧めた。
Aが腰掛けた椅子の前には小さな丸テーブル。その上にはしおりの挟まれた読みかけの本と、飲みかけの紅茶。
Mは持って来た新たなカップに紅茶を注ぎAに差し出すと、自分も席に着いた。
蒼いベールで素顔を隠し、全身も同じような布で隠されている。

まるでそれはイスラム教の女性のような隠しようである。紅茶を注いだときの手ですら手袋で隠されていた。
Aは「なぜ部屋に入れてくれたのですか？」と不思議そうに尋ねた。
「この屋敷には至る所に“眼”がありますのよ」
「それは監視の眼ということでしょうか？」
思い当たる節がある。サロンでJと会話をしていた時のことだ。気づいたら二号の視線、そして現れたマダム・ヴィー。
「監視……マダム・ヴィーが奴隷たちにわたくしたちを監視するように命令しているとでも？」
「違いますか？」
「違わないとは言えませんけれど、この屋敷には別の者の“眼”もありますのよ」
「誰の眼ですか？」
「たくさんの“眼”。マスクで覆われたたくさんの“眼”たち。部屋の外で話していれば、必ず誰かの“眼”に止まります」
果たして誰の眼に止まるというか。マダム・ヴィーや奴隷たちの眼でないとしたら、客人たちか、それともまだAの知らぬ者たちがいるのか。
誰の眼であれ、この屋敷にいる者たちは信用ならない。Mは今、Aに忠告めいたことを話しているが、その意図ですらどこにあるのかわからない。
部屋に招き入れたと言うことは、その“眼”に聞かれたくない話がある筈。
乾きはじめた喉をAは紅茶で潤した。
「もしかして僕に何か大事な話でもあるのですか？」
「……」しばらく黙したのち、「この屋敷からお逃げになって。貴方はこの屋敷にいる誰とも違う。招かれざる客は早々に屋敷を立つべきですわ」
「逃げる？　穏やかな話ではありませんね。この屋敷にいると僕に

何か大変なことが起こりますか？」
Ａの脳裏に過ぎったのはＧの死。
「何が起こるのか、それは起きてみないとわかりませんわ。ただ……マダム・ヴィーは気まぐれなお人ですから」
「それはマダム・ヴィーが僕に何かするということですか？」
「ええ、すでに。わたくしは貴方に注意を促すことはできても、手助けをすることはできません。むしろ、その逆でしょう」
「逆？」
「この部屋には貴方とわたくし、そしてほかの者の“眼”が実はあるのです。その者は実に気まぐれですから、もしかしたら貴方の邪魔をすることになるかもしれませんわね」
「誰かにいるのかこの部屋に！」
「どちらの手に委ねるか……そう考えた時に何を優先するべきか。貴方が客人ということをお忘れなく、客人であるうちは安全ですわ。少なくともマダム・ヴィーの魔の手からは……」
「教えてくれ、マダム・ヴィーのほかに……危険な……」Ａの眼が見開かれた。「飲み物に何か……どうして……貴女が……」
Ａの意識は深い闇に呑まれた。

謎の鍵

そこには燃えるような真っ赤なルージュ。
目を覚ましたAは驚きのあまり蛇に睨まれた蛙のように、躰がすくんで動かなくなってしまった。
ベッドに横たわるAの顔を覗き込んでいたのはマダム・ヴィーの視線。彼女は車椅子から身を乗り出し、愛でるような瞳でAを舐め回すように見つめていた。
「お目覚めね。ワインでもいかが？」
ルージュから発せられた言葉を寝起きのAは理解するのに時間を要した。
「いえ、それよりも……ここは？」
自分が使っている部屋とは違う場所。
部屋は煌びやかに装飾され、嫌みなほど豪華絢爛な部屋であった。性格に例えるなら傲慢。部屋の主を表しているようであった。
「わたくしの部屋よ」
答えを聞かずとも、すでに察しはついていた。そのことよりも、ここがマダム・ヴィーの部屋だとするならば、なぜここにいるのかということのほうが問題だ。
ここで目覚める前に残っている最後の記憶。それは蒼いベールから覗く哀しげな二つの瞳。そうだ、AはMの部屋にいた筈であった。
明らかに不自然な気の失い方。さらにはマダム・ヴィーの元へ連れてこられた。まさかMにはマダム・ヴィーの息が掛かっているのか。だが、取り巻く環境を考えれば、誰もが信用ならず、マダム・ヴィーの影響下にあるような気がする。
Aは何を質問するべきか迷っていた。自分がここにいる理由を問うことは危険を孕んではいないだろうか。だが、この不自然な状況を聞かぬ方がそれこそ不自然ではなかろうか。
「僕はなぜここにいるのですか？」

「昏倒して気を失った貴方の様態を診るため、わたくしの元へ運ばれてきたのよ」
「医学の知識がおありで？」
「ええ、少しばかり」
この時、Aはケシ畑のことを思い出していた。ケシから生成されるモルヒネは麻酔薬として使われる。だがそれだけの理由で、裏庭で“麻薬”にも使われる植物を栽培するだろうか。
「それで何か僕に異常は見つかりましたか？」Aが尋ねると頭を振った。
「いえ、外的な症状は特出して目立った異変は診られなかったわ。ただ少し疲れているだけでしょう。今も蒼くやつれた顔をしているわ――まるで悪魔を目の前にしているような」そう言ってマダム・ヴィーは含み笑いをした。
Aは取り直そうとして柔和な表情を作ろうとしたが、強ばった頬が言うことを利かない。そんなAの表情を読み取った様子のマダム・ヴィーは、気分を害するどころか喜んでいるようだった。精神的に嬲りことをおもしろがっているようにも見える。
少しずつだがAは落ち着きを取り戻していた。そして、マダム・ヴィーと二人っきりで話をするまたとない機会であることを察した。
「つかぬ事をお伺いいたしますが、Gから僕のことをなにか聞いていないでしょうか。僕の意識がない間にGが、皆さんにどのように僕のことを紹介したのか気になってしまって」
「特になにも聞いていないわ。この屋敷では人の素性を詮索するような無粋な者はいないもの」一呼吸置いて、「この意味がおわかり？」
Aは背筋をぞっとさせた。
マダム・ヴィーはAが詮索をしていることに気づいているのだろうか。二号からいくばくかの話を聞いているかもれない。
相手がどこまで知り得ているのか、それによってカードの切り方が変わってくる。投げかける質問は慎重でなくてならない。たとえ

尋ねたいことが山のようにあろうと、焦ってはいけない。
地下室へ近づくことは容易に許されてはいないが、それ以外の場所の立ち入りについて忠告を受けた覚えはない。だとしたら庭の散策で不都合なものを見られることはないと言うことだろうか。
一か八かAは質問を投げかける。
「そう言えば、今日は庭を拝見させていただいたのですが、裏庭に少し臭いは強いですが赤く美しい花が咲いていました。あれはなんという花でしょうか？」知っていることをあえて尋ねた。
「ケシの花よ。モルヒネ、そしてアヘンの材料になるわ」
「ああ、あれがケシなのですか。友人がアヘン窟に通っていたのを思い出しました」
「貴方もアヘンを？」
「いえ、僕は……」
Aはもう少し踏み込むべきか迷っていた。本当に聞きたいことはケシの話ではない、そのケシ畑の近くにあった“モノ”だ。
――やはり聞くことは出来なかった。代わりに違う方向から訊くことにした。
「ところでGの亡骸はどうなりましたか？　もう埋めてしまったのでしょうか、できれば墓地に祈りを捧げてやりたいのですが」
「ええ、裏庭の一画に急ごしらえだけれど埋葬したわ。数日後には整然とした墓ができあがるでしょう」
「あの場所に案内してもらいたいのですが？」
「あとで奴隷に言い付けて置くわ」
「ありがとうございます」
Aは深い礼をしたあと、ベッドから降りようとしたのだが、その胸板をマダム・ヴィーの手袋をした繊手が強く押した。
「まだお休みなさい」
「いえ、もう大丈夫です」
「本当にそうかしら？」
繊手で首筋をなぞられたAは身を震わせ、次の瞬間には全身から

力が抜けてしまっていた。
熟れた真っ赤なルージュが迫ってくる。それは果実と言うより炎。全てを喰い尽くす紅蓮の業火。
Aは本能で恐怖を感じた。
脳が揺さぶられる。
酷い頭痛を感じたAはその場で身悶えた。
脂汗を掻きながら一欠片の精神力を振り絞ってAはこの場から逃げようとした。この状況から逃げることで、マダム・ヴィーの機嫌を損ねることにならないか。そのようなことなど考える余裕もなく、ただ逃げようとした。
「もう大丈夫です……失礼……します」
激しい呼吸の合間に途切れ途切れで発せられた言葉。明らかに様子がおかしく、それを相手が察しない筈もないが、構わず余裕もなくAはベッドから這い起きて部屋を飛び出した。
マダム・ヴィーは追いかけてこなかった。そのそぶりすら見せなかった。
どうにか部屋の外に逃げ出したAをそこで待っていたのは、Jの姿。彼は心配そうな口元を露呈していた。
「どうかしたのかい？」
「いや……」
口では否定しながらも、躰の均衡を崩して倒れそうになったAをJが抱きかかえ、肩を貸してしっかりと立たせた。
「顔色が悪く酷い汗だ。部屋まで送ろう」
「……すまない」
もはやAはひとりで歩くこともままならない状態だった。
部屋に向かいながら多少の落ち着きを取り戻し、Aの思考にも余裕が生まれた。
「なぜマダム・ヴィーの部屋の前に？」
「たまたま通りかかっただけさ」
「嘘だ。貴方はおそらくしばらく前から部屋の前にいた、理由はわ

からないが」
「理由などないさ。ボクはたまたま通りかかっただけだからね」
Ｊの目的や真意を問いたかったが、はぐらかされるの落ちだろう。今はそれを問うことを諦め、Ａは別の質問を投げかけることにした。
「この屋敷ではアヘンを扱っているのですか？　たとえば、貴方もその客の一人。貴方自身は吸わないとしても、貿易関係の仕事をしていると言っていましたが、それはアヘン貿易のことでは？」
「客……好い線を行っているが、アヘンは余興に過ぎない。少なくとも遊技としてはね」
「余興？　遊技としては？」
「マダム・ヴィーの財源の一つであったとしても、彼女にとってアヘンは嗜好品としての価値はそれほど高くはないということさ」
ならば余興の先にもっと価値あるモノがあるということか？
歩いて進むうちに今いる場所が大階段の裏であることにＡは気づいた。
「こちらにも道があったのか」
「奥まった場所にあるので気づきづらいね。この屋敷はＴ字になっているけれど、二階はそうではなく長方形になっているのだよ」
そして、大階段の真裏には大きな扉があった。
「その扉は？」Ａは尋ねた。
「ふふ、地獄の扉……というのは冗談で、ただの地下への階段さ」
悪戯なＪの口元。なぜか冗談には思えない雰囲気を醸し出していた。
やがて階段を上り廊下を進み、Ａの部屋の前までやって来た。
Ａは借りていた肩を返してＪから離れた。
「ここまでで結構です。ありがとう」
しかし、Ｊの手は急にＡの腰に廻され、瞬く間に抱き寄られてしまっていた。
「まだ心配だ。ベッドまでお付き合いしよう」
マスクの下から覗くＪの熱っぽい視線。
耐えかねてＡはＪを突き飛ばそうとしたが、それよりも早くＪは

さっと身を引いた。
そして、この場に現れた二号。
「お館様のお言いつけで参りました。A様のご様態をお館様は案じております。それからG様の墓までの案内を申しつけられております」
二号の出現にJは軽い会釈だけしてこの場から風のように立ち去ってしまった。
Aは手の汗をズボンで拭いながら、二号への受け答えを考えた。その時、Aはあることに気づいた。ズボンのポケットになにか硬い物が入っている。だが、その場では確認せずに何食わぬ顔をした。
「少し気分は優れないが、お気遣いは必要ない。Gの墓へはまた今度にするとしよう。あぁ、それから夕食は自分の部屋でゆっくりと摂りたいのだが？」
「かしこまりました。夕食はお部屋までお運びいたします」
「ありがとう」
なぜかその時、二号の瞳は戸惑うように揺れ動いていた。
「どうかしたのか？」
「いえ、なにもございません」
「本当に？」
「お礼の言葉を言ってくださるのは、A様とJ様だけのものですから」
会釈をして二号は逃げるように立ち去ってしまった。
さっそく部屋の中に入ったAはポケットの中を確かめた。中に入っていたのは鍵。とても大きな物で、これを使用する扉も大きなことが予想される。
いったいどの扉の鍵なのか？
そして、どうのような経緯でAのポケットに入ったのか？
経緯については、Aに記憶がないのなら、何者かが混入させたと考えるのは自然だろう。
では、いったい誰が？

いつ混入されたのか考えながら、Ａは時間を遡った。最後に会ったのは二号だが、鍵を入れられるほど至近距離まで近づいていない。だとするならば、Ｊ、そしてマダム・ヴィーが怪しいことになる。その二人にとりあえず絞り、別の方向から二人に繋がる点はないかと考える。

わざわざ鍵を渡すということは、どこかの扉を開けろということだ。その扉を突き止めることにより、自ずと人物が見えてくるかも知れない。

この鍵が合うような大きな鍵穴を持つ扉。Ａには三つの心当たりがあった。正門、玄関、地下への扉。このうち玄関は元々出入りが規制されているわけではないので、残る二つに絞ることができる。

推測は一つの可能性。実証をしてみなければ答えはわからない。だが、試すにしても機会を窺わなくてはいけない。

いつの間にか気分もだいぶ良くなっていた。そのため、Ａはさっそく扉を探しに行くことにしたのだった。

目的もなく無意味に屋敷を歩き回ることでさえ、何かしら危険を感じるというのに、扉を探すことはどこか後ろめたさ、もしくは危険を孕んでいるのではないだろうか。

急にＡは立ち眩みを覚えた。脳裏にはマダム・ヴィーのルージュ。彼女は詮索されることを好まないらしい。ならばやはり扉を探すことは、知られてはいけない。だが、万が一、彼女が鍵の送り主だったとしたら？

まるで手招きされているような……。そうだとしたらぞっとする。それでもＡは行動をやめなかった。

大階段の近くまでやって来た。ここから先は人と出会いたくはない。周りに人がいないことを確かめていた時、大階段の裏から二号が姿を現した。もしも慎重を期せず足を踏み入れていたら、言い訳の苦難することであった。

二号はＡを確認した立ち止まった。

「ご気分はもう宜しいのですか？」

「ああ、だいぶ良くなったみたいだ。そうだ、ここであったのはちょうど良い、Gの墓へ案内してくれないか？」
扉を探すことは一時取りやめだ。
「かしこまりました。こちらでございます」
歩き出した二号に付いてAも歩き出した。
二人は玄関を出て裏庭に向かった。その道筋はAが通ったことにない経路。辿り着いた場所も来たことになかった場所だった。
そこには崩れかけ、おそらく放置されているのであろう墓石がいくつかあった。同じ場所にGが埋まられていると考えると、たとえ親しみなどなくともAは哀れな気分になった。
Gの墓にはまだ墓石はなく、十字に組み合わせれた木が立ててあるのみだった。
膝を突いてAは指を組んで祈りを捧げた。
立ち上がったAは辺りを見回しながら墓石について尋ねる。
「あの墓は誰の？」
「存じ上げません」
「存じ上げない？　この家の者の墓ではないのか？」
「お館様からはなにも聞かされておりません」
本当にそうなのかもしれない。墓の荒れようを見れば、マダム・ヴィーがこの墓にどのような思いを抱いているのかおおよその察しはつく。もしかしたら思いすらないかもしれない。
「一つ頼みを聞いてくれないか？」もの哀しげな声音でAが囁いた。
「なんなりと」
「時間の空いた時でいい。墓に花を手向けてやってくれないか。Gの墓だけでなくほかの墓にも」
二号は明らかに言葉に詰まり戸惑っている様子だった。
しかし、「かしこまりました」と小さく頷いた。
そしてAは「ありがとう」と呟いた。

地獄の門

陽の下を生きるものたちが寝静まった頃、眼を充血させたAは部屋を出た。

少し動悸がするようだ。手にも汗を握っている。夕食から今間までの時間、とても長いものに感じられた。

閑散たる廊下。明かりすらも灯っていないその場所を、目を凝らしながら壁に手を伝いながら歩く。

テラスの先に見える月明かり。蒼い天幕が空を覆っている。

大階段を降りた時、Aは気配を感じて物陰に潜んだ。

ゆらりゆらりと揺れながら、ランプの灯火がこちらに近づいてくる。

暗闇の中からぬうっと現れた強面の男。血色が薄く、額に縫い跡があるその男は、たしか昼間あの井戸で見た大男。

見回りでもしているのだろうか、大男はランプを片手に辺りを入念に調べながら、ゆっくりと歩んでいる。

Aは大階段の裏へ行きたいが、大男に見つからないように移動しているうちに、いつの間にかまったく違う場所へと追いやられてしまった。

後ろから迫ってくる大男に気づかれぬように、足音を立てずに一本道の廊下を走るA。そのまま食堂まで来てしまった。

大男の様子を窺うと、運が悪いことに食堂に来ようとしている。さらに追い詰められてAは食堂の奥から台所へ移動した。

調理台の陰に身を潜めるが、こんな場所ではすぐに見つかってしまう。焦ったAの目に入ったのは勝手口であった。

すぐに勝手口の内鍵を開け外に飛び出した。

外に出てしまったAは目的地を変更することにした。心当たりのあるもう一つの扉だ。

月下で見るその門は、昼間よりも格段に不気味さを増していた。

形を変えぬ筈の悪魔の彫刻たちが、今にも動き出しそうなくらいだ。
このマダム・ヴィーの館から、外へ通ずる巨大な正門。
さっそくAは持っている鍵を鍵穴へ差し込んでみた。だが、深く差すこともできず、鍵は半ばで止まってしまった。念のために回してみるが、やはり動かない。
扉には左右二つの鍵穴があり、さらに念のためもう片方の鍵穴にも差し込んでみるが、結果は同じだった。
「違うのか……」
その呟きは鍵穴が合わなかったことではなく、鍵を渡された理由が想像と違っていたと思ったからだ。Aはこの鍵が自分を外の世界へと解放してくれるものだと、心の片隅で期待を抱いていた。だが、門はその重い口を開くことはなかった。
疑問が再燃する。
この鍵でどこの扉を開け、そしてそこで何をしろというのか？
鍵を渡された理由が見当も付かない。Aは途方に暮れそうになりながらも、思い当たるもう一つの扉のことを考えた。そろそろ見回りも終わった頃だろうか。
しかし、その前にAには確かめたいことがあった。
さっそく月明かりを頼りにその場へ向かう。
昼間のその場所はもの悲しい場所であったが、夜のその場所は気味が悪く静まり返っている。裏庭の一画ある墓地だ。
退廃した墓石たちに囲まれ、その粗末な十字は今にも倒れそうになっていた。
Gが埋められているという墓。
そして、手向けられてた花。
花はGの墓だけでなく全ての墓に供えられていた。
感慨深い表情をしながらも、気持ちを一転させてAは木の十字架を引っこ抜き、それを使って土を掘り返しはじめた。
冷たい夜風が吹かれながらも額に汗を滲ませるA。
土は想像以上に硬い――まるで初めてその地面が掘られたように。

時間を掛けて一心不乱に土を掘り起こしていくが、何も見つからない。棺すらもその場所には埋まっていないのだ。
やがてAの手には肉刺ができ、擦り切れた傷が痺れるように痛んだ。
「……ない」
掘り進めることを諦めたAは土を戻しはじめた。
Aの掘った穴は棺を納めるには小さく、もしかしたら掘る場所がずれていた可能性も考えられたが、それはすぐに否定された。Aは土を戻しながらあることに気づいたのだ。その地面に雑草が生えていることに。
点々と生えている雑草。その隙間を掘り返した程度の小さな穴では、棺に入っていない人すら埋めることはできないだろう。やはりここには何も埋められていないのだ。
そうなるとGの屍体はどこにあるのか？
なにも埋まっていないその場所に、Aは再び十字の墓標を立て、花を置いた。
刹那、その場に鬼気迫る気配がした。気づいた時にはそれが眼前まで迫っていた。
牙を剥く黒い獣。
反射的にAは横に飛び退いて地面を転がる。
鼻先に残る生臭い臭い。
それは巨大な黒犬だった。
筋骨隆々の躯が躍動し黒犬が再び牙を剥いてAに飛び掛かって来る。
犬の凶器は一つしかない。爪を狩りの道具にする猫とは違い、犬は真っ先にその牙によって獲物を仕留める。
Aは目に飛び込んできた木の墓標を手に取り、それを黒犬に噛ませた。そして空かさず犬の口を押さえる。犬の涎がAの手にこびりつく。
暴れ回る犬の力は想像以上に激しく、Aは振り回されそうになる

のを必死で堪え、さらに強靱な顎の力によって開こうとする口を押さえるので精一杯だった。
そんなさなか、さらなる危機がすぐそこまで迫っていた。新たな刺客。今目の前にいる犬に加えて、さらに二匹の黒犬がAを取り囲んでいたのだ。
ここで押さえている手を離せば、すぐにでも目の前の獰猛な獣は襲い掛かってくるだろう。かと言ってこの場を離れなければほかの犬に襲われる。
危機を回避する術を失ったAに取り込んでいた二匹の犬が襲い掛かって来た。
生臭さがして噛み殺される寸前、急に犬たちが動きを止めた。それでもまだ気が立っている様子で、睨み付けるようにAを見張りながら涎を垂らしている。Aが口を押さえていた犬でさえ動きを止めてしまっている。
戸惑いながらAが辺りを見回すと、鬼火のような灯火がこちらに近づいてくる。
Aは息を呑んだ。
その場に現れたのは、あの大男だ。
地面に尻餅をつきながら全身の血を引かせているAを、大男はじっと見つめているようだった。明かりが弱くその表情まで読み取れず、言葉すら発しないために、大男が何を考えているのかわからない。
徐々に冷静さを取り戻してきたAは、失敗を犯してしまったという気持ちが募りはじめていた。こんな夜更けに、しかもこんな場所で、おそらくマダム・ヴィーの奴隷の一人であろう者に見られてしまった。このことは大男の口からマダム・ヴィーに伝えられることになるだろう。その時マダム・ヴィーはどんな反応をするのだろうか。
マダム・ヴィーはどの程度の寛容さを持ち合わせているのか、Aの立場が危うくなることは避けられないかも知れない。

大男がなんらかの合図をしたらしく、黒犬たちがAに背を向けた。そして、無言で立ち去る大男と共に闇の中へ溶けてしまった。
未だに尻餅をついているAは、手に付いた土を払いながらゆっくりと立ち上がった。
やはり勝手口から外に出たのは迂闊だったのか知れない。鍵が開いていることに気づき、大男が庭の見回りをはじめたことは十分に考えられる。
Aはまだその場から動けなかった。
これからどうするべきか、今日はおとなしく部屋に戻るべきか、それとも開き直って大胆な探索をするべきか。まだ深夜の遅い時間だ、今すぐマダム・ヴィーに報告されると決まったわけではない。こちら側が迂闊な行動に出て、相手の行動をわざわざ早める必要もない。だからと言って、おとなしく部屋に戻って運命を待つというのも、死刑執行日が決まった囚人のようだ。
もしもマダム・ヴィーへの報告が明日だった場合、それまでの時間は有効に使えるのではないか。だが、それにはこれまで以上に注意が必要になる。なぜなら、マダム・ヴィーには報告されなくても、あの大男はAを警戒している筈だ。
しかし、警戒している筈ならば、なぜこの場で何もしなかったのか。そのような権限、ないしは自由すら奴隷たちにはないのだろうか。それとも別になにかあるのだろうか。
考えれば考えるほどに先が見えなくなる。
そしてAは行動を選んだ。
足早に勝手口まで戻り、扉の取っ手を回す。鍵は掛かっていなかった。すぐに中へ入り、鍵を閉めた。
辺りに気配はない。
慎重に歩きはじめるA。ここで大男とは別の者に出くわせば、また新たな問題の火種となるだろう。もう誰にも見つかってはいけないのだ。
同じ場所に長くいることは危険だが、Aはこの場所である物を探

そうとしていた。
引き出しを片っ端から開けては落胆して閉める。そして、いくつかの引き出しを開け、ついに捜し物を見つけたのだった。Aが手に取ったのはマッチだった。
向かう場所はもう決まっている。もちろん地下への扉だ。台所を抜け、食卓を抜け、廊下を歩き続ける。今のところ気配は感じられない。
さらに歩き続け大階段までやって来た。大階段の裏手は死角であり、Aは覗き込んでその場所を確かめた。誰もいない。
そして、ついに地下への扉までやって来たのだ。
ひとまずここでAは手の汗を拭い、それからあの謎の鍵を懐から取り出した。
再び手の汗を拭った。
手とは逆に唇が乾燥し、口の中はねっとりと粘つく。
鍵を握り締め、恐る恐る鍵穴に差し込む。呑まれるように鍵が鍵穴に埋まっていく。そのまま鍵は根本まで刺さった。
しばらくAは動けなかった。開くかも知れないという期待と驚きが入り交じり、極度の緊張が全身を襲ったのだ。
いったい地下に何があるというのか？
鍵がゆっくりと回される。
そして、カチッという音が静かに鳴り響いた。
「……開いた」魂が抜けるように囁いた。
扉に付いた頑丈な取っ手を引くと、重たい扉がゆっくり動きはじめ、その少し開いた隙間から冷たい風が流れ込んでくる。
人が来る前にAは扉の中へ入り、すぐさま出入り口を閉ざした。一瞬にして辺りは闇に呑まれる。すぐに先ほど手に入れたマッチに火を付ける。弱く心許ない灯火だが、すぐ近くなら見ることができる。
Aは扉を入念深く見て、そこにあった内鍵を閉めた。
そして、ついに先の見えない地下への階段を下りはじめた。

この先に進めば、鍵を渡された理由もわかり、さらにその人物も特定できるかもしれない。
一歩一歩階段を下り、周りの空気が変わっていくことを肌で感じた。湿度が高く、かび臭い。それに加えて、生臭さも漂ってくるような気がする。
階段はほどなくして終わった。それほど深い階段ではなかったが、来た道を振り返ると先は闇に呑まれている。本当にあの先に出口があるのか疑いたくなるほどだ。
廊下の幅は二メートルほど。壁や床は切り石を敷き詰められ、しっかりとした造りになっている。やはり先は見えない。
慎重に廊下を進むと、やがてT字路に差し掛かった。そこで慌ててマッチの火を消したA。片方の道から明かりが見えるのだ。
Aは片足を引いた。
引き返すべきか進むべきか迷うところだ。
まだなにも掴めていない。ここで引き返して、次の機会はあるのか。だが、先に何が待ち受けているとも知れない。
「ヒャァァァッ！」
甲高い悲鳴が鳴り響いた。
Aは心臓を鷲掴みされた気分だった。
悲鳴は明かりの方から聞こえた。男とも女ともわからない。ただあの先で怖ろしいことが起きていることだけはわかった。
Aは進んだ。重い躰を引きずるように歩き、慎重に明かりの下へ近づく。その明かりは扉から漏れた物だった。少しだけ開いたままになっている扉。まるで覗き見ることを誘っているようだ。
そっと扉の隙間に顔を近づけるA。好奇心が勝ったと言うより、見ないことの方が不安を掻き立てたのだ。
覗き見る眼の瞳孔が開いた。
部屋の中で全裸の少年が蹲っていた。まるで怯えるように、枷の嵌められた手で頭を抱えている。よく見ると足にも枷が嵌められている。

そして、その少年の背中を踏みつける紅いハイヒール。
薔薇の刺繍がされたタイツに隠された形の良い美脚。だがもう片方の脚はなく、代わりとなっていたのは松葉杖。そこにはマダム・ヴィーが立っていた。
部屋にはこのほかにも数人の女奴隷たちがマダム・ヴィーに従えていた。ここでもやはり奴隷たちはフェイスマスクで顔を隠している。その不気味さは、この状況下においていつもよりも増している。
マダム・ヴィーの艶やかな声が響く。「この子は駄目ね。仕込んでも売り物になりそうもないわ今のままでは」
奴隷たちが動きはじめる。主人の言葉の先をすでに理解しているのだ。奴隷たちによって少年は仰向けに寝かされ、身動き一つ出来ないように床に押さえつけられた。
奴隷の一人が部屋の奥に吊り下げられていた鋸を持って少年の元へ近づいてきた。
まさかとAは息を呑んだ。
少年は恐怖のあまり白目を剥きながら失禁した。
それを見て嬉しそうに嗤う濡れたルージュ。
「どこを隠したら美しく、想像を掻き立てられるかしら」
あまりにおぞましい発想だが、ある種のフェティシズムには通じている。
それは腕のないミロのヴィーナスや、腕はおろか首すらもないサモトラケのニケのように、無いことによって完成された珠玉の芸術。
人を隠された物を想像し、時に思いを馳せる。
マダム・ヴィーは顔を動かしながら足の先から丹念に少年を見ているようだった。
「足……太ももの付け根は素晴らしいわ。ちょうどこの付け根に黒子があるのね」
皮膚はそれ自身の色が消え失せた時からフェティッシュとなる。という言葉がある。
ただ真っ白なキャンバスよりも、そこに汚れや傷があったほうが、

フェティシズムの対象になりやすい。白いキャンバスに落とした一滴の黒インクは、キャンバスの白さを引き立てながら、さらにそれ自身も目を惹き魅力的である。
「両腕を切断しましょう。そうね、肩から十五センチくらいのところがいいわ」
マダム・ヴィーの言葉を聞いてなんの躊躇いもなく、奴隷が鋸を少年の上に押し当てた。
そして――。
Aはそれ以上見ていることができなかった。
その場から足早に逃げるAの背中に、地獄の絶叫が針のよう降り注いだ。
暗闇の中を壁を手で探りながら小走りで進んでいたAは、途中で思い出したようにマッチに火を点けた。壁を擦っていた手のひらは皮が剥け血が滲んでいた。そのことにすら今気づいた。
先の見えない階段を上る。行きに通った道だというのに、今では全く違う道に思える。もしかしたら、扉を開いた先には別の世界が広がっているのではなかろうか。そんな幻覚すら頭を過ぎってしまう。
気づけば扉は目の前にある。
固く閉ざされた扉をAは必死になって押した。何度押しても、どんなに力を込めて開かない。後ろから追いかけてくる恐怖で発狂しそうになりながらも、Aは必死でそれを堪えてようやく気づいた――内鍵が掛かっていることに。
慌ててAは鍵を開け、そのまま扉を力一杯押して外に飛び出した。
扉を出来るだけ静かに閉め、その場から逃げようとして足を踏み出し、扉に鍵をかけ忘れたことに気づいて足を戻した。
鍵をどこにしまったのか思い出せない。ポケットや懐を順に調べて、やっと鍵を見つけて扉に鍵を掛けた。
そして、歩き出そうと振り向いたその先に――大男は立っていた。
何も言わずただAのことを見つめている。

その瞳はとても物悲しく、口は何かを言いたげに震えている。
混乱に陥っているAは言い逃れの言葉すら出ず、ただその場から逃げることしかできなかった。

食卓を飾る薔薇

昼と夜とが交差する。
太陽が西から昇り東へ沈み、月もまた同じ道を辿る。
土の中から朽ちた木が這い出し、枯れ果て乾いていた幹や枝に瑞々しさが戻り、葉を碧く茂らせ花を咲かす。さらに枝は短くなり、幹もまた細く短く退化していく。やがてまた木は土に還るだろう。
生命が巡り廻る。
木陰に腰掛ける妊婦に寄り添う少年。
しばらくして逆光を浴びた大柄の男が手を振りながら現れた。
それ仲睦まじい家族の追想。
生まれてくる新たな生命に祝福あれ。
だが、少年の眼前で男は溶けるように腐り、見るも無惨に顎が落ち、歯茎から歯がこぼれ落ち、やがて全身が崩れた。
木霊する妊婦の悲鳴。
やがてその場に現れた一匹の魔獣。
血に飢えた魔獣は発狂している妊婦を攫った。
そして、少年の瞳に焼き付いた紅い牙。

拳を強く握り締めながらAはベッドで目覚めた。滲んだ汗で背中が冷たく、とても不快感を覚える。ここ数日、良い目覚めをした例しがなかった。
すぐにシャツを着替えていると、部屋の扉をノックする音が聞こえた。Aは袖のボタンを閉めながら扉に向かった。
扉を開けるとそこに立っていたのは「お目覚めですか」二号だった。「食堂にお越しならないようなので、ブランチをお持ちいたしました」
「もうそんな時間なのか」
「はい、十時半を過ぎたところでございます」

夜更かしをしたとはいえ、Ａはそんなに長く寝るつもりはなかった。さらに十分な睡眠はとれている筈なのに、とても躰がだるい。時間は十分でも質の悪い眠りだったのだろうか。

二号は食事を部屋の中まで運び入れ、早々に立ち去ってしまった。

Ａはソファに腰掛けながらサンドウィッチを頬張った。うまく食べ物が喉を通らず、コップに葡萄酒を注いで一気に飲み干した。

言い知れぬ不安をＡは感じていた。正体のわからぬ不安は突然にやって来たものではなく、今朝目覚めた時にはすでに存在していた。

Ａは過去を遡る。昨夜、あの地下室で見てしまった光景。今でも耳にへばりついて離れない叫び声。

あれが不安の原因なのか。たしかにあの光景が後押しになったことは間違いない。だが、それ以外にも幾つもの要因が折り重なっている。

考えれば考えるほど不安になってくる。

Ａは居ても立っていられなかった。

地下室から出て来たところをＡは見られてしまったのだ。あの大男はあれからどうしただろうか。すでにマダム・ヴィーの耳に入っているのだろうか。もしもそうなら、なんらかの行動があちら側から起こるかもしれない。

なにが起こるのかわからない。対処のしようもないではないか。それでもＡはなにかしら備えなければと思い立った。

Ａは食事も終わらぬうちに部屋を飛び出した。

目的地は決まっていないが、目的は決まっていた。まずは二階を散策することにした。その矢先、Ａはテラスに人影を見た。

「ちょうど良かった、あなたを探していたところです」Ａはテラスのテーブルで紅茶を飲んでいたＪに会釈した。

「ボクにわざわざ会いに来てくれたのかい、嬉しいね」Ｊは近くに立っていた奴隷に目を配り、席を立ち上がった。「天気の良い日は散歩に限る。さあ、早く」Ａの返事も聞かずＪは行ってしまった。

すぐにＡはＪの後を追い、二人は玄関を出て庭の散策をはじめた。

辺りは真っ赤な薔薇が咲く薔薇園だった。
周りに人がいないことを確認してAが口を開く。「Gの腕時計のことですが、あなたはこれを事故現場から盗んだわけですよね？」
「盗んだというのは人聞きが悪いけど、取ったことには間違いないよ。そう、ボクは玄関に転がっていた屍体から腕時計を外した。なぜだかわかるかい？」
「時計は壊れて刻を止めていました。その時間がテラスから転落した時間を示す証拠だからでしょうか？」
「違うね。キミは根本的に間違っている。先入観に囚われてはいけないよ」
「どういうことです？」
Jは含み笑いを浮かべ、庭を見渡すようなそぶりをした。「昼の庭は実に平和だ。血の臭いを嗅ぎつける獣もいない」
その言葉を聞いてAは背筋を冷たくした。昨晩、凶暴な犬に襲われたことを思い出したのだ。あえてAはそのことを伏せた。
「昨晩、犬の鳴き声のようなものを聞いたのですが、そのような動物が庭にいるのですか？」
「夜になると番犬が庭に放たれるんだよ。奴らは血肉が好きでね、知らない人間なら誰でも襲い掛かる。例えこの屋敷に何度も訪れているボクですらね」
明らかにJはなにかを教えようと示唆している。
犬とGがAの頭の中で交差する。
玄関先にあったGの屍体。血は流れていたが、踏み荒らした痕跡はなかった。テラスから落ちた衝撃だろう、少し手足が変な格好をしていたが、後から服が乱されたような痕跡もなかった。そう、おそらく落ちたまま、現状が保存されていたのだろう。
そしてAは閃いた。
「もしかしてGがテラスから落ちたのは犬がいない時ですか？」
「そうなると朝方以降だね」
「では壊れた腕時計が示していた時刻は朝だなんてことは……」

「可能性としてはないくはないけどね。そもそも第一発見者がボクというのも可笑しい。あんな場所に屍体が転がっていたら、別の者が気づく筈さ。だから時計の止まっていた時間に落ちたのなら、ずっとその場に転がっていたわけではなくなるからね。しかし、その根本の考えがそもそも間違えなのだよ」

また根本という言葉を使った。

おそらくJの考えでは時計の示していた時刻は夜であると言うこと。しかし、屍体が落とされたのは明け方以降だと言うこと。Aの考え方ではそれでは矛盾が生まれてしまうが――。

「ボクはね、Gの屍体が発見される前夜、大きな物音を聞いているのだよ」

「まさか事件と関係が？」

「あれはキミとサロンで別れた後だよ。部屋に戻ったボクは、隣の部屋から大きな物音がするのを聞いたんだ。その隣の部屋というのがGの部屋さ。あとはキミの想像に任せるよ」

おそらくその音がした時刻こそが、壊れた腕時計が示していた時刻なのだろう。そうするといくつかの疑問が解決する。

はじめから、そうではないかとAは思っていたが、ついに確認に変わりつつあった。「やはり事故ではなく……殺人」

「殺人だなんて穏やかではないね。そんな怖ろしいこと、この屋敷の常連のボクからすれば、考えられないことだよ」

「それは本当ですか？」

「ああ、例えばSは気性が荒く、幾度となくボクは脅されているけれど、実際に暴力を振るわれたことはないからね」

「マダム・ヴィーはどうですか？」

「なぜその名前を出すんだい？」Jの口元が不気味に微笑んだ。

Aは初めてJに恐怖を抱いた。まるでJはその言葉を待っていたようだ。そうだ、Jは確信を持ってAを誘導しているに違いない。これまでだってそうだった。

ならばここであれを出すべきだろうとAは考えた。

「この鍵に見覚えはありませんか？」
Ａは懐から地下室の鍵を取り出して見せた。
「知らないなぁ」わざとらしい口ぶり。その口も浮かぶ嘲笑が、その言葉が嘘だと言うことを物語っている。
急にＡは苛立ちを覚えはじめた。
「あなたの目的はいったいなんなんだ！」
「目的……しいて言うなら、キミのことを好いているだけさ」
マスクの奥から覗くＪの視線は熱を帯びていた。妖しげな艶やかさを醸し出す瞳だ。
急にＪの顔がＡの眼前まで近づいてきて、その顔がふっと視線から逸れて、Ａの耳元に唇を近づけた。
「知っているかい……この屋敷に来る者たちの目的を？」
甘く囁く声色。躰の芯がぞくぞくする鈴を転がすような声音。
動けず立ち尽くすＡの耳元でさらに、「若くて綺麗な男を買いに来るのだよ。客は女だけではないよ、金と地位のある知識層の男にはその手の趣味を持つ者が多くてね」
鳥肌を立てたＡは素早く身を引き、Ｊから距離を置いた。
「あなたもその客なのですか？」
「そうでなければ、この屋敷に長くは居られないよ。麻薬の取引相手よりも、こちらの客をマダムは手厚くもてなしてくれるからね」
Ａの脳裏に突然蘇る光景。
あの地下で行われていた地獄の所行。
「ただの人身売買ではないでしょう。僕はマダム・ヴィーが少年の腕を……うっ」
急に吐き気を催しＡは口に手を当てた。
それを見てＪは笑っていた。
「そうかキミは見たのか。ボクはその現場を生で見たことはないけど、マダムが何を行っているかは知っているよ。ここに来る客ならば誰でも知っていることだが。彼女は調教師……というより芸術家というふうが相応しいだろうね」

Aが激昂する。「あれが芸術だって！　神に対する冒涜じゃないかっ！」
「この屋敷に神などいないよ――いるのは悪魔だ」
「ならここに来る客達は皆、悪魔に魂を売った手下ですね」
「そうかもしれないね」Jは自称気味に笑い、少しだけ俯いて見せた。
Jはなにを思っているのだろうか。
そして、Jは顔を上げて口を開いた。
「先ほどの鍵のことだけどね。あの鍵をキミに預けたのは紛れもないボクさ」
「やはり……でもなぜ？」
「もともとボクもあの鍵を別の人物から譲り受けたのだよ」
「誰ですかそれは？」
「それは言えないよ。“彼女”にも立場があるからね」
いつものように明確な答えは言わなかったが、“彼女”という言葉を若干強調したような気がした。
急にJはAの躰を抱き寄せた。
「けれど、キミがボクに心も体も服従を誓うのなら、教えてあげてもいいけどね」
「やめてくれ！」
AはJの両肩を掴んで力一杯押し飛ばした。
その弾みでJは地面に尻餅をついた。
しかし、Aは謝りもせず、ましてや言葉すら掛けずにその場から逃げ出した。
足早に玄関に向かう途中にAは気づいてしまった――物陰に隠れていた人物に。それは先ほどJとテラスにいた奴隷の一人だ。まさかずっと監視されていたのか。
屋敷の中に戻ってきてしまったAは、これからどうするか迷い果ててしまった。まだJには聞きたいことがあったが、今さら戻るわけにもいくまい。

次の糸口は“彼女”だろう。その“彼女”が誰なのか、突き止めることが筋書きだろう。Ｊはその筋書き通りにＡが動くように、あえて“彼女”の正体を明かさなかったのだから。

Ｊの思惑通りに動くことに躊躇いがないわけではないが、それが吉と出るか凶と出るかはまだわからない。少なくともなんらかの進展はあるだろう。釣り針の餌に食いつけば、とりあえず腹は満たされるのだから。

“彼女”に当てはまる人物は誰だろうか。Ｊの匂わせ方から察するに、たどり着けないことえでないだろう。そうすると今この屋敷にいる人物である可能性が高いだろう。

奴隷たち、客人、そしてマダム・ヴィー。

マダム・ヴィーが直接Ａに鍵を渡す理由は乏しいが、Ｊであるならば客の一人として商品を見せるためなどに鍵を渡すかも知れない。そうすると『“彼女”には立場ある』とは、どのような意味だろうか。鍵を渡したのが誰であれ、本来その鍵は譲渡するような物ではないということか。

だとするならば、マダム・ヴィーである可能性は低くなる。なぜなら彼女はこの屋敷でお館さまと呼ばれ、不可解な決め事を客人たちにまで強い、絶対権力者として君臨しているからだ。彼女の権力の大きさから考え、鍵を渡すと彼女が決めれば、それを阻むものはないだろう。この屋敷の現状からは、マダム・ヴィーの立場が揺らぐことは今のところなさそうだ。

“彼女”が客人の中にいる可能性。今、屋敷に滞在している女はＳとＭの二人しかない。たとえ二人しかいなくても、判断材料がなければこれ以上は絞り込めない。

ＳとＭのどちらともあまりＡは会話をしていない。Ｓに至っては話にならないし、やっと会えたＭとは……。

Ａはあの時のことを思い出した。そう、Ｍと会話していた最中に意識を失ったことだ。彼女の行動と言葉は矛盾しているように思われた。

屋敷から逃げろと促しつつも、何らかの罠にAを嵌めてマダム・ヴィーに引き渡したと思われる。その意図は未だにわからない。また話をしてみる必要がありそうだ。

最後に“彼女”が奴隷たちの誰かだった場合。もしもそうだった場合は、絞り込むことが困難だ。Aはまだ何人の奴隷がいるか把握していない。Aが少しばかり知っているのは二号くらいなものだ。

今までAが見てきた限り、この屋敷には男よりも女のほうが多そうだ。そう考えると、“彼女”という示唆は、あまり役に立たないかも知れない。

女のほうが多そうだというのも、あくまで今まで見てきた限りのこと。まだ知らぬ人物が屋敷には多くいる可能性もある。少なくとも地下で一人見たのだから。

Aはこれからどこに向かうか考える。

マダム・ヴィーにはあまり会いたくない。なぜなら昨晩の光景を鮮明に思い出すのが怖かったのと、大男から報告を受けているとしたら、何かしらしてくるかもしれないからだ。

奴隷たちも信用ならない。マダム・ヴィーの手が及んでいる。先ほども監視されていたかもしれないと言うのに。

残るはSとM。二人の部屋は覚えている。隣り合わせに位置していた。

とりあえず両方に当たろうとAは考え廊下を歩き出した。

仮面の女

廊下を歩くAはSの部屋を通り過ぎ、Mの部屋の前に立った。
扉を軽く叩く。
思いの外早く扉が開き、蒼いベールのMが顔を覗かせた。
「どうぞ、早く中へお入りなさい」
その言葉にAは躊躇せずにはいられなかった。前回の訪問時、おそらくMは何らかの工作をして、Aはマダム・ヴィーへ引き渡される結果となった。信用ならぬ相手の部屋に容易に入ることは愚の骨頂。
しかし、進まねばならない。
部屋に入ったAは前と同じ席に通された。そして、またもや出された紅茶。さすがにAは手をつけなかった。
「また僕に薬を飲ませる気ですか？」棘のある強い口調でAはMを攻めた。
「いいえ、今日は何も」その言葉は薬を入れたことを認めることだった。「部屋に入る時に誰にも見られておりませんから」
Aは少し眼を丸くした。「前は誰かに見られていたというのですか？」
「ええ」とMは短く。
やはり見張られているのだとAは確信した。軽率な行動は慎むべきだが、すでに遅いかもしれない。
Aは少し迷いながらティーカップの持ち手を掴んだ。そのまま動きを止める。
その姿を見たMは、「わたくしをあまり信用なさいませんように」相手の心を揺さぶるような言葉。何を信じるべきか、その決断を揺るがすものだ。
深く呼吸をしてAはマスクの奥の瞳でMを強く見据えた。
「貴女は誰の味方なのですか？」

「誰の味方でもありませんわ。ただ誰の敵でもないだけ」
「しかし、僕に薬を飲ませマダム・ヴィーに引き渡したのは貴女でしょう？」
「それがわたくしのためであり、貴方のためであり、マダム・ヴィーのためであったからですのよ」
この屋敷の中で、目的がようと知れる者は誰一人とていない。誰の行動も不可解であり、謎を孕んでいる。彼らの台詞はまるで謎かけのようだ。
Aは懐からあの鍵を取り出して見せた。
「これがなんだかわかりますか？」
Mが答えるまでには少しの間があった。
「どこでその鍵を？」
その物言いはどこの鍵であるか知っている。
「Jから譲り受けました」
その名前を出すことは賭であった。もしもMがJへ鍵を渡した本人でない場合や、敵であった場合は、その名前を出すことによってJの立場を危うくする。さらにJだけではなく、Aにまで波紋が及ぶ可能性は大いにある。
「もうお使いになりましたか？」
「地下でマダム・ヴィーが少年を痛めつけている無残な光景を見ました」
「ほかには何か？」
探るように訊いてくるM。
正直にAは答えた。「なにも」
「そうですか……ならその鍵はわたくしがお預かりしますわ」
「なぜ？　これは貴女の物なのですか、貴女がJに渡した物なのですか？」
「ええ、訳あってわたくしがJに託しましたが、貴方には必要のない物」
言葉だけでは本当にMがJに鍵を渡したのかわからない。

Aは鍵を懐にしまった。
「残念ながら僕は貴女を信用できない。鍵を欲しいのならJを通してください」
それ以上Mは無理強いなどをすることはなかった。
鍵はしまわれたが、まだ鍵の疑問が全て解決されたわけではなく、Mから訊けることはまだありそうだ。
「もしも本当に貴女がJに鍵を渡したのなら、その理由はなんですか？」
「それはJにお聞きくださいませ」
「では地下には僕がまだ見ぬ何があるというのですか？」
「……深入りする前に早く屋敷から逃げた方が良いでしょう」
「前も貴女は逃げろと言いつつ、僕に薬を飲ませたではありませんか」
「逃げることを忠告することと、わたくしがマダム・ヴィーの敵ではないと言うことは別の話ですわよ。貴方に一刻も早く屋敷から逃げて欲しいと思っているのは本心」
言葉と行動、どちらを信じるべきだろうか。
しかし、AはなぜかMが敵であると思えなかった。なぜだろう、Mの醸し出す物静かで、穏やかな雰囲気がそう思わせるのか。
今まで成された会話は、もしもMが敵であった場合、Aの立場を危うくするものだろう。
そして、ここまで話を進めた以上は引き返すことも出来ない。
「そんなに逃げろと言うのなら、その方法を教えてくれませんか？」
「それは……わかりません」
「無責任な。方法もなく行動をすれば、危険に身を投げるのと同じではありませんか」
「けれど、この屋敷にいれば大きな災いに見舞われるかも知れませんわ」
「いったい何が起こるというのですか！」
声を張り上げたAの脳裏に浮かんだのはマダム・ヴィーの狂気。

地下で行われていることをAは見た。
だが、マダム・ヴィーがAに何をした？
可能性を除けば、マダム・ヴィーがAにしたことは、客人への持て成し。良い部屋を与えられ、服や食事の面倒まで看てくれている。事故に遭ったAを助けたことにもなっている。そこに可笑しい決め事を強いている。
一見してAは良い待遇を受けているが、それでもなぜか付き纏う不安。
もしかしたら、屋敷を出たいと申し出ればすんなりと事が運ぶかも知れない。そんな期待を裏切るのは、Gの死、Jの行動、Mの言葉。
しかし、マダム・ヴィーに直接なにかをされた覚えがAにはない。
何もかも妄想に駆られているだけではないか。もしくは全てはただの悪い夢。
急にAを目眩が襲った。
「また……薬……いつの間に！」
椅子から転げ落ちながらAはティーカップを倒した。
慌ててMはAを抱きかかえる。
「大丈夫っ！？」
躰が揺さぶられる。
Aの視界に映る蒼い残像。
「しっかりなさい。わたくしは何もしておりませんわ！」
「嘘だ……」
「嘘では……せんわ……おそらく……マダム・ヴィーが……」
すでにMの声は途切れ途切れでしか聞こえなかった。
Aは遠のく意識に逆らいながら、手を伸ばしMのベールを剥ぎ取った。
ぼやけていた視界が一瞬だけ晴れた。
女の顔。
哀しい眼をする女の顔。

そこにあったのは――悪夢に出てきたあの女の顔だった。

視界を覆う闇は、呼吸すらも蝕んだ。

眼を見開いたAが見たものは自分の上に馬乗りになるSの姿。Sが両手でAの首を絞めている。驚きつつもAは逃げようとするも、躰は縄で拘束されてベッドに縛り付けられていた。

じわじわとSの手に力がこもる。少しずつ締め上げられていく首。Aの口から漏れる声にならない濁音。

急にSの手からふっと力が抜けた。途端にAは激しく咳き込んだ。それを見下しながら嗤うSの唇。

「きゃはははは！」

「……げほっ……うう……どうして……」

声は嗄れ、混乱するAの頭。

またMに謀られたのか？

Sはベッドの上に立ち、網タイツを穿いたつま先をAの腹からシャツの中へ忍ばせた。そして、蹴り上げるようにして、シャツのボタンを飛ばし、Aの素肌を露わにさせた。

「貧弱そうな躰ね！」そう言いながらSは激しくAの胸板を踏みつけた。

「ウゲッ！」

呼吸が一瞬止まり、悶えたくなるほどの痛みが奔るが、躰は拘束されて動かない。

Aは咳き込みながらSを睨み付けた。

「どうして……こんなことを！」

「どうして？　楽しいからに決まってるじゃない！」Sはつま先で絵を描くようにAの胸に這わせ、さらに下腹部でなぞるように動かした。「ほら、もっと声を出していいのよ！」捻じ込むようにSの足がAの股間を圧迫した。

「クッ……僕が貴女に何をした！」

「きゃはははっ、この屋敷から逃げようなんて思わないことね！」

「逃げる……僕はそんなこと……」
「ヴィーが何を考えてるか知らないけど、アタシがアンタを醜い奴隷にしてやるよ！」
Ａは逃げようと手を動かすが、縄が手首を余計に締め付けるだけだ。
「なんで僕がお前の奴隷なんかに！」
「気に食わないからに決まってんだろ。アンタの目的なんて疾うにお見通しなんだよ！」
「目的？」
「惚けてんじゃないよ！」
まったく惚けているつもりはなかったが、Ａは鎌を掛けるために相手を挑発することにした。
「お見通しなら言ってみろ！」
「Ｇと同じでこそこそ調べてんだろ、この屋敷のことを！」
「Ｇと同じ？」
その言葉は呑み込むべきであったが、思わず出てしまった。これ以上鎌を掛けられなくなる。
一瞬動きを止めたＳだったが、急に笑い出した。「きゃははは、やっぱりアンタもＧと同じで記憶を消されてるようだね。だからって目障りなことには変わりないよ。奴隷になるか死ぬかどっちか選びな！」
「どっちも嫌だ！」
もしかして……という考えがＡの脳裏を過ぎった。
「もしかしてＧの死にお前が関係してるのか！」
「だったらどうする？」
「目障りだって理由……いや、Ｇを殺した根本の理由はなんだ！」
「知りたきゃ自分で思い出すんだね！」
Ｓの足がＡの股間を蹴り上げた。
痛みを耐えながらＡは思考を廻らす。
いったいＧは何を調べていたというのか。それによってＧは殺さ

れたのか。そしてGを殺したのは果たしてSなのか。
再びSに股間を蹴り上げられ、Aは叫びそうになるのを堪えた。
今はこの状況を打開しなくてはならない。いろいろと思考を巡らすのはその後だ。
「奴隷になると言ったらこの縄を解いてくれるのか？」
「奴隷に自由なんてあるわきゃないだろ！」
それならば死んだ方が自由があるかもしれない。それでも今はまだ死ぬわけにはいかない。奴隷に甘んじていれば、いつか機会が巡って来るかも知れない。さすがにこのままずっと縛られたままということもあるまい。
Aはわざと怯えたような表情をして、「奴隷になる……だから、殺さないでくれ」震えた声を出した。
「いいわ、そうだよ、身も心もアタシに捧げるんだよ」
満足そうなSの淫らな唇。
その時だった。
部屋に飛び込んで来た謎の影。
驚くSにJが飛び掛かった。
揉み合いになりながら二人は床を転がり、先に立ち上がったSが近くにあった花瓶を手に取った。
「死ねーッ！」
叫びながらSは花瓶でJの顔面を強打しようとした。
空かさずJは両腕で顔面を防御して、割れた陶器の破片を浴びながら、肘でSの顔面を強打した。
均衡を崩して横転したSにJは馬乗りになり、懐から注射器を取り出してそれをSの脇腹に射した。
「紳士として女性を殴る羽目になるとはね」
「ぶっ殺してやる！」
Sは叫びながらJの躰を突き飛ばし、さらには狂気に駆られて倒れたJの臑に噛み付いた。だが、Sはマスクの下で眼を丸くした。
Jの口元が笑みを浮かべる。

「噛みたければ好きなだけ噛むといいさ、義足でいいならね」
やがてSは大人しくなり、瞬きが緩やかになると気を失った。
服の埃を払いながら立ち上がるJ。その身の熟しは義足とは思えない。
「お互い酷い目に遭ったね」
Jはベッドに上がり、Aの躰を跨いで乗った。そして、露わになっているAの肌を指でなぞる。
「そそる躰だ。ちょうどいい、キミが動けないうちに……なんてね、冗談さ」笑ったJはAの縄を解きはじめた。「ボクにそんな趣味はない」
そんな趣味はない？
今まで演技だったというのか？
助けられたAは、腑に落ちないことがいくつもあった。
「どうして僕を助けた？」
「どう見ても助けなくては危うい状況だっただろう。しかし、これで今まで石橋を叩いて渡って来た僕の行動にも支障を来してしまった。時間稼ぎをするべきだろうね」
「貴方の目的はなんなんだ？」
「さて、なんだろうね」
Jは黙々とSの躰を縛り上げた。手足を縛られたSは、目を覚ましても動くことはできないだろう。
そして、JはSのマスクに手を掛けようとしていた。
「一つ、前々から確かめたいことがあった」
そう言ってJは一気にマスクを剥ぎ取った。
Aは驚愕した。
そこにあったSの素顔はMと瓜二つ。双子か、それとも同一人物なのか。
急にAを襲う激しい頭痛。
目眩で世界が歪む。
倒れそうになったAをJが抱きかかえた。

「大丈夫かい？」
その声もまるで遠くから聞こえるようだ。
このままでは気を失ってしまう。
割れるように痛い頭で働かない思考をAは無理に廻らせた。
この頭痛と目眩には何か理由がありそうな気がした。
切っ掛けはおそらくSの素顔。
悪夢の中で見た女――母とおぼしき者と同じ顔。
「まさか……そんな……どうして……」
虚ろな瞳でAは呟いた。その全身からは汗が噴き出している。
記憶は未だ戻らない。それは母なのか、それすらもわからない。
ただ、思い出そうとすればするほど、頭痛と目眩が酷くなる。
さらには嘔吐までしそうになりながら、Aは全てを堪えてSから距離を置くべく隣の部屋に移動した。
Aがソファに腰掛けると、すぐにJが後を追って来た。
「どうしたのだい急に？」
「……わからない」
どうにか意識を失わずに済み、徐々に体調も安定してきたが、まだ少し動悸がする。
「キミの看病をしてあげたところだけれど、事が急になってしまったものでね。次の行動に移らなくてはならない」言いながらJは手を差し出したが、それは手を貸すという意味ではなかった。「鍵を返してくれたまえ」
「地下に行くのか？」
「そういうことになるね。できれば避けて通りたい道だったけど、キミが調べてくれるのを待っても居られない」
「もしかして貴方は地下に降りたことがないのか？　僕に調べさせていたというか！」
「そういうことになるね。しかし、いつかは行くつもりではあったよ」
やはりAはJの駒だったようだ。今まで良いように動かされてき

た。
Aは怒りを覚えつつも、重要なのはそこではない。
「貴方の目的はなんなんだ！」
それこそが最大の疑問。
Sの言葉によればGも何かを調べていたのだという。Aもいろいろと調べてきたが、その動機は記憶を取り戻すためである。GとJにはどのような理由があるというのか。
「鍵は渡さない」断固とする態度で言い切った。
Jはほくそ笑む。「ならば一緒に来るといいよ。キミも興味があるだろう？」
あの場所でAが見たものは無残な光景。だが、Mはほかに何かがあることを示唆していた。果たして行く価値のあるものなのだろうか。
さらにJは畳み掛ける。「噂によると奴隷達を搬入する隠し通路もあり、そこは外に繋がっているらしいよ」
「本当に外へ出られるのか？」
「さて、それはわからないね。ボクが知っているのは情報でしかないから、真実とは限らない。確かめたいのなら、キミは自ら地下に行かなくてはならないよ」
本当に外に出られるのなら価値のあることだ。外の世界へ行くことにより、記憶を取り戻すことができなくなる可能性もなくはないが、こんな屋敷に長居をしたいとは思わない。
「わかった、行こう」
「ならば今すぐだ。Mだけでなく、Sも姿を長く見せなければいつかは異変に気づく者も現れるだろうからね」
「やはりSとMは同一人物なのか？」
「おそらくね。ボクは二人は同時に存在したのを見たことがない」
二人はSを残して部屋を後にした。

煉獄迷宮

まだ陽の高いうちから二人は地下に足を踏み入れた。
細心の注意を払いＪが洋燈に火と点ける。一瞬にして仄かに染まった長い階段。だが、その先はぽっかりと口を開けて闇へ手招いている。
再びこの道を下ることになるとは、Ａは躊躇せずにいられなかった。それでも構いもせず先を進むＪについて行かざるを得ない。もう後戻りができないことはＡも重々承知していた。
Ｊは地下で何をしようとしているのか。彼の話によれば、この地下に外への出口があるらしいが、その話はついでに出てきたようなもの。おそらく彼の目的は別にある。
地下は空気は重く湿っている。そして、どこからから臭ってくる生臭さ。
獣の臭いのようだが、それは紛れもなく人の臭い。汗や肉、さらには血の臭いだ。
ついにあの曲がり角まで来た。道は二手に分かれている。
立ち止まったＪ。「さて、どちらに進むべきか」振り返りながらＡを見た。
「すぐあちらにある部屋でマダムは拷問をしていた」
「拷問ではなく調教だろう。では、逆の道を進んでみるとしよう」
廊下は果てなく続く。まるでそれは地獄へ続く洞窟のように。
やがて二人は鉄格子の前までやって来た。それは牢屋であった。狭い牢屋の先の暗がりで、何かが蠢いている。
微かに聞こえてくる呻き声。まるで地獄を吹く風のような低い声であった。
Ｊは恐れもせず洋燈を鉄格子の隙間から中へ入れ、暗がりを仄かに照らした。「誰か居るのか？」
返事と呼べるものは返っては来なかったが、獣が威嚇に発する唸

り声のようなものが聞こえた。
Ｊは再び、「誰か居るのか？　奴隷か、それとも――男爵様でしょうか？」
その呼びかけに、牢屋の隅から何かが這って鉄格子に近づいて来た。
Ａは一瞬、目を背けたがすぐにそれを凝視した。
果たして人と呼べるものなのか、乞食のような身なりをしたそれは、骨と皮だけの腕を突き出し鉄格子を握り締め、毛の塊と化した頭部の髪と髪の隙間から、鈍く輝く瞳でこちらを見ていた。さらに目を背けたくなった理由は、その者には両足がなかったのだ。着ている襤褸布で隠れているが、おそらくは脚の付け根あたりから消失している。
唸るような声で男は囁いた。「儂を知っておるのか？」嗄れた声であるが、芯は強く聞き取れる。
Ｊは恭しくお辞儀をした。「お初に御目にかかる。ボクが誰かおわかりか、男爵様？」
髪の隙間から覗く眼が大きく開かれる。何か思うことがあったのかしれないが、彼は押し黙って何も言わない。
薄く笑うＪ。「御目にかかるのは初めてだが、ボクに何か思うところがあったみたいだね」そして、一呼吸置いて。「こうお呼びした方がボクの正体がわかるでしょう――叔父上」
「なっ！」男の短い一言に驚愕の度合いが込められている。
「隠し子の一人だよ、ボクの調べた限りではおそらく末っ子ということらしい」
「この伏魔殿に足を踏み入れるとは……ヴィーに正体を知られればただでは済まんぞ」
「もう過去に一度、ただでは済まなかったよ。けれど、マダムは今のボクが何者であるか気づいてはいないだろうね」
目の前で繰り広げられる会話にＡはついて行けなかった。Ｊが地下に来た理由は、おそらくこの年齢もわからぬ男に会いに来ること。

だが、それそのものが理由ではなく、先に何かがあるのだろう。
「口を挟んで悪いが、状況がよく掴めない」
Ｊと男の視線がＡに向けられた。
なぜか楽しそうに笑っているＪが、「ここにいるのは領主Ｘと呼ばれる者の弟だよ」
まさか！
以前、Ｊは領主Ｘの存在をマダム・ヴィーの夫として臭わせていた。そして、ここにいるのがその弟であり、叔父と呼ばれたと言うことは――。
「貴方は領主の息子なのか？　そうだとしたら、マダム・ヴィーの息子でもあるのか！？」
声を荒立てたＡをＪは一笑した。
「とんでもない、ボクがマダムの息子だなんて。Ｘには何人もの愛人や、行き連りの女が山のようにいたのだよ。生ませた子供は数知れない。ボクもその一人に過ぎない――が、そのうち何人が生き残っているのか」
死んでいる……そう自然に何人も死ぬはずがないので、殺されたと捉えるべきだろうか。
「ボクはね、過去にマダムに捉えられ、奴隷として調教され、そして売られたのだよ。片足はその時に斬られた。それからボクは飼い主の元から逃げた――正確には飼い主は死んだのだけれどね」また楽しそうにＪは笑った。
少しずつＪの目的が見えてきたように思える。点と点が糸によって結ばれはじめる。
男はＪに尋ねる。「兄御前はどうなったのだ？」
「さて、ボクは会ったことがないものでね。噂によれば生かさず殺さず、ずっと寝たきりだそうだ。おそらくマダムの仕業だろう、まだ彼女には実権がない、夫が死ねば自分の立場が危うくなることくらい承知なのだろう」
「貴君の目的は何だ？」

「マダムがなぜ叔父上をこの場所に幽閉したのか、外に出られては困るからだろうね。ならば外に出すのみだよ」
Ｊは懐から鍵を出した。古く錆びた鍵だ。それを見て驚いたのは男だ。
「どこでその鍵を……」
「ある男が大事に隠し持っていたよ。本人はその鍵が何であるか覚えていないようだけど」
「持っていただと？　疾うに死んだ男だぞ？」
「死んではない……いや、魂は死んでいると言うべきか。マダムに手を加えられたらしく、木偶の坊と化してはいるがね。Ａ、キミも見たことはないかい、奴隷の中に大柄の男がいるだろう？」
大柄の男――その印象に当てはまるのは一人だ。額に大きな傷のある大男。たびたびＡは危うい場面を目撃されている。
男は感慨深そうに瞳に何かを湛えていた。「そうか、生きておるのか。儂と同じく地下に閉じ込められておったが、儂と違い彼奴は死を選んだ。それでも死ねずマダムに活かされておるのか……惨い所業だ。正妻との間に生まれた子でありながら、一族と決別し女と駆け落ちして姿を晦ましたが、それでもヴィーの毒牙に掛かろうとは」
つまりあの大男は領主Ｘの息子と言うことになり、Ｊの義兄と言うことになるのだろう。大男の年齢は大凡だが中年かそれ以上、一方のＪはまだ若いように思える。領主Ｘに多くの子がいるらしいが、子供たちの年齢の幅も大きそうだ。
複雑に絡み合う系譜。
Ｊは鍵穴に鍵を差して回そうとしたが、「回らないな。鍵が違うのか、それとも――」
「鍵穴が錆びてしまったのだろう」と男。
常にどこか妖しげな笑みを湛えていたＪという男が、この時、苦虫を噛み潰したような表情を見せた。
「大丈夫だ、まだ時間はある。道具を探してこよう」Ｊは男に会釈

をして身を返した。「では叔父上、またしばらくのちにお会いしましょう」
早足に去るJを追いかけて横についたAは「僕は貴方が何をしようとしているかわからないが関係のないことだ。ここで別れて出口を探すことにする」
「そうかい。キミにはキミの自由がある、ボクはキミの意志を尊重するよ」
Aは持ってきていた予備の洋燈に種火を貰い、二人は十字路で別れた。
地下はまるで迷宮のようであった。進めば進むほど道は入り組み、道を引き返すことも困難になりそうだ。
暗がりの奥から音が聞こえた。
幾つもの金属質のものが触れ合って響く音。
低い呻き声も聞こえてくる。それも一つ二つではなく、轟くように。
酷い獣の悪臭。
Aは洋燈を向けた。
牢屋の中で人間たちが蠢いている。また別の牢屋の中では、死んでいるのか生きているのか、まったく動かない人の群れ。そして、また別の牢屋の中からはこちらに手を延ばす少年の姿。
「助けてくれ！」
Aはどうするべきかわからず、思わず眼を背けた。
そして、逃げたのだ。
Aの背中に突き刺さる叫び声。足を速め逃げ惑う。地下に一秒たりとも居たくはない。それでも出口を見つけなくてはならない。
無我夢中で逃げたAは道を失ってしまった。自分がどの道を通ったのかわからない。このままでは屋敷にすら戻れない。
焦る気持ち。静かな地下に響く心臓の鼓動。荒い息づかい。
前方から明かりが近づいて来た。はじめはJかと思ったが、それが別の人物であると知ってAは慌てて自分の洋燈を消した。

暗闇に包まれながらその場から逃げようとした。だが、足下が覚束ず、思うように進めない。壁に手を添えながら歩くが、すぐ後ろからは明かりが迫ってくる。
このままでは逃げ切れないと思ったAは走ろうとしたが、躓き転倒してしまった。
手が擦り切れた。だがそんなことに構ってはいられない。後ろから迫ってくる車輪の回る音。
Aは起き上がり様に振り返った。
仄かな明かりの中でもそのルージュは燃えていた。
「こんな場所で何をしているのかしら？」
悪戯に妖しげな美声。
マダム・ヴィーは横にいた女奴隷に命じる。「弱い薬を打ってあげて」
フェイスマスクで覆われた黒い顔が徐々に迫ってくる。
Aは逃げようとするが、手は床を掻き毟り、腰が抜けて立ち上がれない。
奴隷は注射器を持っていた。
抵抗しようとAは手を振り上げたが、その手は易々と掴まれ、女とは思えない力で制されてしまった。
首に突き刺さる細い針。
すぐにAの全身から力が抜けた。まるでそれが自分の躰ではないように、まったく微動にしない。見開かれた瞳に映る真っ赤なルージュ。
「調教部屋まで運んで頂戴」
命令された奴隷はAの両脇に後ろから腕を入れ抱え込み、そのまま引きずって歩きはじめた。
引きずられながらも躰の感覚はなく、前を進んでいるのか、それとも立ち止まっているのか、Aの視界に映っていたのは長く暗い廊下。
突然、Aの視界は大きく揺れ、その躰は仰向けにされた。

部屋に備え付けてあった洋燈に火が灯される。
急な明かりにAは目を瞑りたかったが、瞬きすらも自由にできなかった。
天を仰いでいるAの耳に届くマダム・ヴィーの声。
「さあ、どうしようかしら。また記憶を消すか、それとも……」
失われたAの記憶。それはマダム・ヴィーによって故意に消されたものだったのだ。
マダム・ヴィーの繊手がAの頬を撫でる。
「奴隷にするか、生きた屍に改造するか、標本にするのもいいわ。憎いほどに完璧な肉体、夢を見る余地すら与えない肉体、どれ一つとて欠けてはいけない肉体。今まで何人もの少年の躰を切断し、わたくしが夢想の中に見ていた躰がここにある。少年の見えない腕はここにあった、脚も体も頭部さえ、やはり奴隷にはでない、完璧すぎるもの」
マダム・ヴィーの手がAの服を脱がしはじめる。すでにボタンが外れ、はだけていたシャツをめくり、その胸板に指先が這う。絵を描くように、音を奏でるように、マダム・ヴィーの指は躍った。
「けれど、この肉体が老いる様を見てはいられない。やはりこの躰をありのまま保存して眠らせるほかないのかしら。でも、でもそれでは動く姿が見られなくなってしまう。躍動する筋肉のうねり……動く様をまたわたくしは夢見なくてならなくなるわ。もどかしい、もどかしい躰だわ」
熱っぽい声が響いた。
「どうするべきか……不老不死の妙薬さえ……あら?」
何かに気づいたマダム・ヴィー。それを確認するために壁を見つめているようだった。
「道具が足りないわ」
マダム・ヴィーに顔を向けられた奴隷は慌てた様子で大きく首を横に振った。
「ぞ、存じ上げません。手入れをした道具を昨晩ここに戻した際に

は何一つなくなっておりませんでした」
「何が無くなっているのかしら？」
「鋸、それに金槌も無くなっております」
「貴方は知っているかしら、それらがどこに行ったのか？」
ベールに隠されたマダム・ヴィーがAの顔を覗き込んだ。
この状況で疑われるのはAだろう。現にAは地下に忍び込んでいた。まだマダム・ヴィーはJの存在に気づいていない。
思案している様子のマダム・ヴィー。
「貴方はこの地下で何をしていたの？　そして、鋸や金槌を何に使おうとしていたのかしら……扉や牢を破るため、外へ逃げ出す為かしら。だとしても道具は今どこにあるの？」
マダム・ヴィーはAの下半身をまさぐりながら、ズボンの衣嚢から地下室の鍵を取り出した。
「この鍵で地下に潜り込んだのね。でも、どこでこの鍵を手に入れた……まさか、あの女。すぐにMを探しなさい！　屋敷の中だけではなく、地下も隈無くよ！」
奴隷の一人が足音を立てながら一目散に部屋を飛び出して行った。
マダム・ヴィーのルージュが歪んでいる。不快さを表していることは明らかだ。
「あの女、貴方が誰であるか気づいて情が湧いたのね。貴方をこの屋敷に残しておくためには、あの女を消す必要がありそうね。残念だわ、あの女にもう苦しみを与えることができなくなってしまうなんて」
嗤ったはマダム・ヴィーは、いつもの艶やかなルージュを取り戻していた。
そして、再び繊手でAの躰を撫でる。
「まだ老いるまでには猶予があるわ。一先ずは記憶を消しておきましょう。薬を持ってきて頂戴」
残されていたあと一人の奴隷もこの部屋から消えた。部屋に残っているのはマダム・ヴィーとAのみ。

「貴方をどうするか最終的に決定するまで、どうしようかしら。記憶を消したのちに、洗脳して、あの男の後継者にするのも良いわね。さすがにあの老いぼれを活かしておくのも飽き飽きだわ。ほかの跡取りは居ないも同然だものね。そこへ本当の孫が現れたら……」

Aは驚いたが、声すらも出せなかった。

マダム・ヴィーの言葉を解釈するのは容易いが、その事実を受け止めることは容易ではない。

本当の孫とは、Aのことで間違えないのか。躰の自由が利かな今、聴覚さえも冒され、聞き間違えだったのかしれない。

しかし、マダムは「これからは貴方が侯爵領を相続するのよ。爵位は貴方の物、そしてわたくしは貴方の妻に」

領主X――つまり領土を持つ存在。それが侯爵というわけだ。Aが領主Xの孫であることは間違いなさそうである。少なくともマダム・ヴィーはそう思っているのだ。

血塗られた系譜。

Aもまたその系譜に名を連ねる者であったのだ。

マダム・ヴィーに問い質したいことが山のようにあるが、今のAにはそれすらも適わない。

今この時もJは何かをしているだろう。そのJが何をしようと自分には関係ないとAは言ったが、今やその関係は強まってしまった。歳は大きく離れていないとしても、JはAの叔父になるのだから。

Aの躰に触れ、愉しんでいたマダム・ヴィーだったが、奴隷の戻りが遅いことに苛立ちを覚えはじめているようだ。

「薬はまだなの。遅い、遅すぎるわ」

その呼びかけに応じるように、部屋に人影が現れた。だが、それは奴隷ではなかった。

床に向けられた鋸から血が滴り落ちる。それを握る手――J。

深紅の魔獣

「ご機嫌ようマダム・ヴィー。こんな陰気くさいところで貴女にお会いするとは、不釣り合いな場所だね。それとも此処こそが貴女の城かな？」

「Ｊ……どうして貴方が……」

驚き言葉に詰まるマダム・ヴィー。

「さて、どうしてだろうね」

人をからかうような口ぶりのＪ。

血塗られた鋸を見れば、芳しくない状況であることはわかる。ただ、マダム・ヴィーはなぜＪがそのような真似をしたのか、わからない様子だった。

「貴方の目的は何なのかしら……わたくしを快く思わない人間の一人だったというわけ？　今までわたくしを騙し続けていたというの！」

マダム・ヴィーの叫びが木霊した。

笑みを浮かべたＪの唇。これほどまで邪悪な笑みは見たことがない。

「貴女はボクのことなど覚えていないかも知れない」Ｊは車椅子のマダム・ヴィーに躙り寄った。

この時、Ａの躰は徐々に回復しつつあり、微かに動いた首を横に曲げそれを見た。

ＪはＡに背を向けた形で、マダム・ヴィーの目の前で仮面を外したのだ。

「でもね、この顔の傷は貴女のことを覚えている。そして、この斬られた片足もだ」

言い放ったＪの肩越しに見えたルージュが驚き開かれた。

「あの老いぼれの……子供の……若くて最も美しい顔を持つ……そんな嘘よ、魂のない家畜と化した貴方が！」

「地獄から蘇ったと言うべきか、ボクは今此処にいる」
「何が目的、何が目的なの！」
「貴方の夢の終わりを告げることだよ」
「わたくしを殺す気！」
「そんな生ぬるい真似はしないよ。キミは生かす、現実の中でね」
突然、奇声をあげたマダム・ヴィーがＪに襲い掛かった。だが、マダム・ヴィーは非力な女でしかなかった。この場には奴隷たちもいない。マダム・ヴィーはＪに車椅子から引きずり落とされてしまった。
さらにＪは車椅子を遠くの壁に投げつけた。
「ちょうどいい、この部屋には貴女を拘束する手錠や鎖がいくらでもある」
Ｊはマダム・ヴィーに背を向け、壁に掛かっていた拘束具を取ろうとしていた。そんなＪの脚を床で這っていたマダム・ヴィーが払った松葉杖に取られてしまい、思わず転倒を余儀なくされた。
すぐにマダム・ヴィーはＪの躰に飛び掛かった。
真っ赤に燃えるルージュが牙を剥く。
Ｊの瞳孔が開かれた。
まさか、そんなことが起ころうとは――マダム・ヴィーがＪの首に噛み付こうとは思い寄らなかった。
頸動脈は歯によって引き千切られ、噴き出した血はマダム・ヴィーのベールとルージュをさらに紅くした。
痙攣をするＪに馬乗りになりながらマダム・ヴィーは嗤った。
「キャハハハハハッ、家畜の分際で、所詮は喰う者と喰われる者の違いなのよ！」
狂気の沙汰。
まだＡは動くことができなかった。
マダム・ヴィーが床を這ってＡに近付いてくる。その手がＡの躰に伸びた時、部屋に二人の人間が飛び込んできた。
絶叫するマダム・ヴィー。

「M！」
そう、この場に姿を見せたのはM。さらにその横にはなぜか二号の姿が。
すぐにMと二号はAを抱きかかえて部屋から逃げ出すとする。
床に這いつくばりながら手を伸ばすマダム・ヴィー。
「おのれー、おのれーッ！」
叫び声をあげる真っ赤なルージュと、朱い死に化粧をしたJを残して、Aはこの場から逃げ出した。
松葉杖を突く音が追ってくる。だが、それも徐々に遠ざかって行った。
上へと続く階段。決して短い物ではないが、今は必要以上に長く感じられる。
二人に肩を借りて階段を登り切ったA。その躰はまだ言う事を聞かない。支えられて立っているのが精一杯だった。
地下を抜け出す扉の前にやっと辿り着き、二号が扉を開けた瞬間、熱風が地下に流れ込んだ。
屋敷に戻って来たAは愕然とした。
燃えていた。伏魔殿に相応しい地獄の業火が屋敷を包み込んでいたのだ。
すぐに玄関に向かったが、扉には鍵が掛けられていた。
屋敷中を駆け回る奴隷たち。逃げ惑いながらも、その忠義――いや、マダム・ヴィーへの恐怖を忘れていなかった。Mを見るや拘束しようと飛び掛かって来たのだ。
それを庇ったのは二号だった。
同じ奴隷同士で、二号もまたマダム・ヴィーを恐れていた。それなのになぜ、今になってマダム・ヴィーを裏切るような真似をするのか。
「お逃げくださいM様」
目の前の奴隷を押さえながら、切羽詰まる言葉であったが、Mはそれを聞こうとはしなかった。

「逃げるのなら皆一緒に」
そうしているうちに、やがてマダム・ヴィーが追い着いて来た。
「屋敷に火を放ったのは誰！　早く消しなさい、消すのよ！」奴隷たちに命令をし、Aに肩を貸すMの前まで一歩一歩と近付いて来る。
「火を放ったのは貴女たちね！」
Mは何も答えずマダム・ヴィーと対峙した。
その場に新たに現れた奴隷がマダム・ヴィーに駆け寄って来た。
「大変で御座います、奴隷の一人が台所を故意に爆発させたようです」
さらに別の方角から駆け寄って来た奴隷が、「屋敷の至る所から炎が上がっております。もうこの屋敷は……」
叱咤するマダム・ヴィー。「うるさい！　何があろうと消すのよ、この屋敷を守るのよ！」
この間にも炎は屋敷を蝕んでいた。
Aは急な目眩に襲われた。激しい頭痛の先に、何かが見えようとしていた。そうだ、この頭痛と目眩は、何か思い出せそうになった時、それを妨げるもの。
紅玉が艶やかに燦然と耀くよう、華やかな舞踏会は紅く燃え上がった。
火を放ったのは――。
「お前だ！」
叫んだAが指差したのはマダム・ヴィー。
突然のことにマダム・ヴィーは何を言われたのか理解できない様子だ。
Aは言葉を続けた。
「あの夜、お前は屋敷に火を放った。そして、そして……」
よく思い出せない。
遠い過去から聞こえる鋸を引くような悲鳴。背の高い紳士が突然に藻掻き苦しみ、果てに狂い理性を失い淑女に襲い掛かった。それは何の記憶か？

「そして、我が夫に毒を盛ったのです」とMが静かに言った。「狂乱した夫は人々を襲いました」
Aの記憶が少しずつ穴を埋めていく。
真っ赤なルージュが嗤っている。あの時、この時も、あの艶やかな唇は人の命を弄びながら笑みを浮かべる――マダム・ヴィー。
「復讐のつもり？　何を今さら」マダム・ヴィーはMを嘲笑い、「貴女も十分愉しんだでしょう――Sとして」
「この環境に十能するために生まれたもう一人のわたくし。彼女がどんなに抵抗しようと、もう終わらせなくてはならないのです」
「そうね、仕方がないわね。終わらせてあげるわ、Mを殺すのよ、殺しなさい、S諸共死ね！」
奴隷がMに襲い掛かる。
まだAは思うように動けない。
突如現れた黒い壁。
MとAの目の前に背を向けて立つ大男が、持っていた灯油缶で奴隷を殴り飛ばした。
それを見たマダム・ヴィーが叫ぶ。
「なぜ、生きた屍と化した貴様がなぜ！　記憶など疾うに無い人形の分際で！」
その問いにMが答えを出す。
「姿形を変えられようとも、例え記憶を消されようとも、ひとは魂を持っているのですよ」
そして、奴隷たちはマダム・ヴィーの命令を聞くことを止めた。
屋敷の崩壊と共に、その支配も終わりを告げようとしていた。
奴隷たちが逃げ出しはじめた。
出口である玄関の扉に群がる奴隷たち。その頑丈な扉は囚われた人々を逃がしはしない。おそらく鍵を持っているのはマダム・ヴィー。この状況下に置いても、マダム・ヴィーに襲い掛かろうと考える奴隷はいなかった。
しかし、Aは奴隷ではなかった。

「玄関の鍵を開けろ！」
「わたくしに命令する気？　誰もこの屋敷からは逃がさないわよ！」
窓は全て嵌め殺し。さらに窓には鉄枠が格子に取り付けられており、硝子を割っても人が通り抜けることは出来ない。勝手口のあった台所はすでに爆発で倒壊しているだろうし、その場所に行くにしても廊下はすでに火の海だった。
もうこの場所も時間の問題だ。
マダム・ヴィーから鍵を奪わなくてはいけない。それが解っていても、長年の呪縛から逃れられず、躰が竦んでしまう。奴隷たちも、Mも、躰が震えている。
渾身から力を振り絞り、Aが自由の利かない躰に鞭を打ち床を蹴った。
「鍵を開けろ！」
燃え上がる大階段を背にして、悪魔が嗤った。
飛び掛かって来たAに隠し持っていた短剣の切っ先を向けたマダム・ヴィー。
躰の自由も利かず、さらに勢いのついてしまっていたAは、その刃を避けることができない。
まるで引き寄せられるようにAの躰は妖しく煌めく切っ先へ。
その時だった！
大男がAの躰を突き飛ばし、自らがその刃の餌食に――。
腹を刺された大男は表情ひとつ変えず、マダム・ヴィーの躰を振り払った。
その時のマダム・ヴィーの驚愕したルージュ。
松葉杖を放り出し床に倒れたマダム・ヴィーから、鍵の束が放り出された。
急いでAは鍵を拾い上げ、立ち上がろうとした時、なぜか大男に激しく突き飛ばされた。
何が起きたのかわからずAが大男を見つめ、それに気づき叫ぶ。
「父さん！」

記憶が戻った瞬間、崩れ落ちた天井から巨大なシャンデリアが降って来た。
その真下には大男と、そしてマダム・ヴィー。
「ギャァァァァッ！」
絶叫。
地獄から聞こえて来たような紅い断末魔。
床に叩きつけられたシャンデリアから硝子片が飛散する。
思わずMは目を背けた。
「なんてこと……」
燃え上がるシャンデリア。
二号はAに肩を貸し、さらにMの手も引いた。
「行きましょう」
その言葉は淡々としながらも、Mの手を握る手には力が入っていた。
群がっていた奴隷たちが道を開け、玄関の前までやって来たAは、手に入れた鍵の束を一つ一つ試し、ついにその扉を開けた。
奴隷たちが玄関の外へ流れ出す。
屋敷が燃える。一刻も早くこの場を離れなくては危険だが、離れたい理由はそれだけではない。屋敷からだけでなく、この敷地内から一刻も早く離れたい。
庭の先にある正門を越えてはじめて、自由が得られるのだ。
鍵を持っているのはAだが、奴隷たちは我先にとAたちを抜かして正門へ向かう。
AとMと二号。三人は並んでゆっくりと歩み出す。二号はAに肩を貸し、さらにMの手を引き、三人を結びつけながら。
魔獣の嗤い声が背後から聞こえた。
全身を地獄の炎に包まれた深紅の魔獣。
牙を短剣に持ち替え、三つ足の魔獣が三人に襲い掛かる。
いち早く気づいたのはMだった。
目についた者を狙ったのか、それともはじめから彼女を狙ったの

か、魔獣は二号に襲い掛かった。
それをさせまいとMが立ちはだかる。
惨劇は繰り返される。
二号を庇ったMは脇腹を刺され、その姿はAを庇った大男――父に重なった。
Mは魔獣を強く抱きしめた。
蒼い夜がまるで紅い夕焼けを包み込むように、二つの影絵は交わった。
いや、交わったのは、三つの影だったのだろう。
灰が空に舞い上がる。
母は言った。『いきなさい』――と。
崩れ落ちた時間と影。
声すら出せずAはその場から動けなくなった。
それでも二号はAの手を引いた。
「いきましょう」
二号に導かれAは正門へ向かう。
そこにはすでに奴隷たちが扉が開くことを切に願って待っている。
Aは悟った。
この扉を開かなくてはいけないのは自分だと。
それが宿命なのだと。
鍵の束にある一段と大きな鍵。その鍵は天使の浮彫で模られていた。この鍵が地獄を模った門を開ける物だと直感を覚えた。
天使の鍵を鍵穴に差し込む。
奴隷たちは静まり返っていた。
回される鍵。
響き渡った鍵の開く音。
嗚呼、ついに外への扉が開かれる。
門を開けた奴隷たちだったが、誰一人として外に出ようとしなかった。彼が外に出るのを待っているのだ。その権利を与えられたのはA。

Aは二号に肩を借りながら門の外に出ようとした。その時に気づいた門の外側の模様。皮肉なことに天使たちが戯れる模様だった。
屋敷の内側から見る正門は地獄、屋敷の外から見る正門は天国。
実際は天国の門をくぐった先にあったのは地獄だったと言うのに。
そして、Aは自由の大地に立った。
目の前に広がる青々とした緑。
森を切り開いた小道がどこまでも続いている。
この道は果たしてどこに続いているのか？
寄り添って歩き出すAと二号。
すぐに前方から馬に乗った男がやって来た。その男はAの前で馬を止め、蒼白な顔をしてAと前方で燃え上がる屋敷の影を交互に見た。
「いったい何があったんだ、マダム・ヴィーは無事なのか？」
その言葉でマダム・ヴィーの関係者だとすぐに知れた。
Aは答えなかった。
代わりに二号が答える。「お館様は自らの炎に焼かれお亡くなりになりました――最期まで夢に抱かれながら」
男は二号のフェイスマスクを怪訝そうに見ていた。
「マダム・ヴィーの奴隷か。それにしても、侯爵様が亡くなられた矢先だというのに、マダム・ヴィーまで……」
マダム・ヴィーの策略によって寝たきりにされた領主X。見知らぬ場所ですでに亡くなっていたのだ。それはマダム・ヴィーにどんな運命をもたらす筈だったのか。
「僕たちにはもう関係のないことだ」Aは呟き二号と向かい合った。
「もうこの君のマスクはいらない」
Aは二号のマスクを外した。
そして、少女の素顔を見て大きく息を呑んだ。

夢のおわり

あれから一年の時が過ぎ去った。

忘れてしまいたい辛い出来事であったと共に、忘れてはならない記憶でもあった。だから僕はこうして手記にまとめた。しかし、この本を他人に見せることや社会に発表することはない。もう二度とこの本を開くことはないだろう。

人によってはこの本に大きな価値を見いだす者もいるだろう。それほどまでに、あの事件には多くの有力者が絡んでいた。あの時あの場所にいなかった者も含めれば、その数は計り知れず、政治にも何らかの問題を巻き起こすだろう。

全ての元凶はマダム・ヴィーであるかのように思われるが、その後の調べで全ては領主Xが蒔いた種であると僕は思っている。

はじめからマダム・ヴィーはあのような性格や嗜好を持っていたわけではなかった。

当時、多くの愛人に過ぎなかったマダム・ヴィーの脚を切断したのは、領主Xの嗜好によるものだったのだ。

マダム・ヴィーの望みはいったい何だったのだろうか？

元は領主Xへの復讐からはじまったことだったのだろうか？

そうだとしたら、復讐は新たな復讐を生むことになった。

今回の事件の発端は僕の復讐だ。

父と母の謎の死――実際には失踪であったが、孤児となりやがて大人になった僕は社会に出て事件を調べはじめた。自分の力だけではどうにもならず、その当時どこから話を聞きつけてきたのか、僕に近付いて来た探偵に事件の調査依頼をした。そして、辿り着いたのが謎の女主人マダム・ヴィー。

ある程度調査が進み、僕自らも屋敷を調べようとした矢先だったと思う。未だにそのあたりの記憶は戻らないのだが、おそらく二人ともマダム・ヴィーに捕らえられ、何らかの処置を施されたのだろ

う。
彼も危険を承知の上、大金になると踏んでこの事件に首を突っ込んだのだろうが、それでも死という結果は悔やまれる。
今、僕は彼の事務所を引き継いだ。彼には身よりもなく、探偵事務所もどうなるかわからなかった。特に行く場所のない僕たちが、この事務所を引き継いでも、誰も文句は言わないだろう。
「紅茶をお持ちしました」
少女の声がして、僕は振り返った。
そこに立っている可憐な少女。
僕はその少女にある人物の面影を見た。
その少女はとても母に似ていたのだ。

（完）

夢のおわり（後書き）

この作品を最後まで読んでいただいた方は本当にありがとうございました。
まだ読んでいないという方は、ぜひとも読んでくださいね。

さて、この作品はもともとリクエストで書いた小説です。
リクエストされていたものとはだいぶ遠く離れてしまいましたが。
なにぶん、はじめて各系統の話だったので四苦八苦しました。
雰囲気も、文体も、まだまだ不慣れでつたないものだと思います。
すでに書き直したい部分や加筆したいところもありますが、今はまだ書き直すのはやめて置こうと思います。
いつか実力が上がったときに、またこの作品に取り組みたいものです。

当初の予定よりも分量が多くなり、プロットにはないことを多く執筆したために、回収して切れていないような気がします。
それと、公開の場を考え、描写を押さえたシーンもいくつもあります。
残酷さや性描写など。
マダム・ヴィーが描き切れていないような気がして残念でなりません。

作中でマダム・ヴィーがマダムVではなかった理由。
それはVではなく、ヴィーであることに意味があったからです。
フランス語のｖｉｅ＝ヴィーという意味が込められていたからです。

本当はGではなくて、Dとかのほうがよかったですね。

探偵＝ｄｅｔｅｃｔｉｖｅのＤとか。

ＳやＭはわかりやすいですね。

Ｊにもいくつか込めた意味がありますが、語りすぎてしまうのはつまらないですよね。

いつか、またマダム・ヴィーが夢を見る日まで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1959e/

夢の館

2010年10月8日14時31分発行